
ネギま！ ~二人目と呼ばれた男。~

ノクト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！～一人目と呼ばれた男。～

【NZコード】

N1949W

【作者名】

ノクト

【あらすじ】

青年は、神に選ばれ、世界の抑止力となつた。数多く不適合な転生者を『世界』から排除する為に。

その世界の名は - - - - - 「ネギまー」。

この作品は、ネギや、正義の魔法使いに対してのアンチ要素があります。

始まり（前書き）

『とある魔術の死神戦記』が優先されるため、この作品は、更新が中々できなideですが。

生暖かい目か、白い目で読んでください。

始まり

s i d e ? ? ? ?

「何処だ……此処は……？」

目が覚めたら全てが純白な世界が広がっていた。

「何で……ンなト」「ンだよ」

「お前は死んだのだよ」

……何か聞き逃せないレベルの声が聞こえた方を見ると、とあるのアレイスターみたいな人がいた。

「つまり、アンタは神でアンタが俺を作為的に死なしたと…」

…

「神といつのは比喩だ。そうだな……管理者と言つておいつへすまなかつた」「反省の色が見えねエンだよッ！――！」ぐボハア！？

顔面にドロップキックを咬ます。

「人ブチ殺しといて随分飄々としてンじゃねエか、あアー！？」

「ずつ……ずばん……お前を『じろりたのば』、理由があつてだな」

鼻から滝のように出る血を押さえてるが、気にしない。

「最近、天使達で死んだ人間を転生させる遊びが流行つてゐるようだ。残念ながらその中に下衆な者が好き勝手しようとするのだよ」

あー、大胆読めた。

「だから俺を世界の修正力としてその肩どもを狩れと？」

「聰明だな、理解が早くて助かる。やはり君を選んだのは正解だった

面倒だが、コイツは他に選択肢を残す様な奴じゃあ無さそうだし
な。

「報酬は？まさかタダで働けッつーんじゃねHだろ」

「ふむ、そうだな。その世界を壊こやはりひ。」

「…………は？」

すると、してやった的な笑みを奴は浮かべやがった。

「ははっ、流石に君も予想外だりひ。そう、その世界は君の思いのままだ。」

「良いのか？そんな暴挙。修正力に修正力が働きそうだなア」

「それほど転生者が多いのだよ。まあ安心しろ。奴等と原作キャラの繋がりは無い。」

……原作？

「…………ちよと待て、その世界の名前教える」

“ネギま”だ

……………頭抱えていいか?

「何を言ひ。既に抱えているではないか」

冷静なツッコミ有難うござんしたクソ野郎ツ #

「ははは、どうだ?ハーレムでもやつてみるか?」

「ンなモン現実に出来る訳ねエだろ…。」

一次創作でみんな目指してゐるが、アホらしいとはおもわねエのか?

「……………ハア、それで?俺はこのまま転生者を殺せと?ナイフす
ら握つたことのない、この俺に?」

「安心しろ。君は管理者である私に選ばれた抑止力。最強の超越
者だ。既に『世界』の誰よりも強い　だがまあ、君が望むなら
与えるが」

「頼むわ。『君、既に最強。』とか言われても実感ねエしよう

「ふむ、何がいい?」

「うだなあ……転生者対策 つまり、オタクが欲しがる能力の上にいかなきや いけねエからなア。」

「よし、決めた」

「では、聞いフ」

「NEEDLESの全てのフラグメント つまり神の肉体と神の力、『キリスト・セカンド』のスペックをくれ。」

「フム、『PF・ZERO』はどうする? フラグメントがないから何も覚えられないぞ?」

「そこは技や術、固有スキルを対象にしてくれ、後……」

「どうした?」

「杖と剣をくれ」

「宝具が欲しいのか?」

「違う、サーヴァントだ」

いくらスペックが高かろうが、経験が無ければあっさり死ぬかも
しれん。

魔術に最も秀でた英靈と、剣に最も秀でた英靈。

この二人がいれば、一先ず安心出来るだろう。

「了解した。後、転生者は来る時代が様々なので、時折指示を出
す。」

「了解。ほんじゃまア、行つてくるわ」

「わかつた、世界を頼んだぞ。」

「2次元の世界なのに？」

「フツ、それを言わると痛いな。」

俺は光に包まれ、消える様に世界に向かった。

あ、ついこやかいに生まれか聞く

の忘れてたな。

一人目の転生者。（前書き）

タイトルの意味は、一人目のキリスト。という物です。

一人目の転生者。

s.i.d.eレン

あの後、転生？したんだろうなア。どうやら主人公であるネギの双子の弟として生まれちました。

つまり、レン・スプリングフィールドになった訳だ。

そして内在魔力がとんでもない量らしく、大人達は「流石、英雄の息子だ！！」と喜びました。

面倒くせエ。

それと、これはとても重要な事なんだが……。

俺の髪は白、目は赤色の、分かりやすく言えば。

何か…………とある魔術の禁書目録
の…………一方通行さんにクリソツなんですが。

何故！？Why！？

しかも何でか『王の財宝』^{ガート・オブ・バビロン}出せるんですけど！？

頼んでねエよー! こんな転生者が真っ先に手エ出しそうな能力！！

しかもッ、俺『魔法無力化能力者』だつた！

しかアも！…念じれば『最後の鍵』^{グレートグランドマスターキー}出てきたンですけど…!!

ディナミスや、アーウェルンクスに見つかったら終わりじゃねエ
か魔法世界…!!

何でようにもよつて100年間産まれなかつた！利用したい放題
の存在に生まれちまつてンの俺！？

まあ、『欠片』^{フラグメント}は発動出来た。 ッても剣と杖の英靈は未だ現

れず.....はあ。

それと、なんと俺には妹がいる。名前はアリア。アリア・スプリングフィールドだ。

『アイツ』曰く、好きでもないのに転生された、転生者の中では唯一まともな例らしい。原作も知らない様だ。（俺の存在に何の反応もないから）

で、現在、スタンのジイさんの所に来ている。

例の、薬味^{ネギ}がファザコンになってしまった出来事だ。

「.....そうね、あなた達のお父さんはね、とっても有名な英雄.....そうね、ヒーローみたいな人だったのよ」

「ヒーロー？」

「そう、誰もが危機^{ヒンチ}になつたらどこからともなく現れて、必ず助

けてくれるのよ

「へ、ヒーローかつっこー！ ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

「フフフ、それはひ・み・つ・よ」

この言い方だと、ネカネはあのアホ（ナギ）に会ったことがあるんだろうな。

可能性としては、俺達兄妹が預けられた時に会ったンじゃねえか？

「お兄さま？」

「ン~ビリしたアアリア？」

アリアは俺の事はお兄さま、薬味の事はネギと呼んでいる。

何でそう呼ぶかは、何となくஜ

「ネカネお姉ちゃんが言つたのは本当なんですか？」

「違うよ

「えつ？」

おつと、口が滑った。ま、イイか。

「俺達の父親は確かに英雄だ。だがなア、ナギ・スプリングフィールドは大戦の英雄だ。この意味、分かんだろ」

「……！ はいっ！！」

…………よく分かつたな。ヒント的な意味だつたンだがなア。

何か知らんが、俺がなにか教える度にだか、すごい嬉しいらしい。
すごい笑顔だ。

転生者だよな？この娘。

何だ……この尊敬の眼差しは……。

皮肉にも、最初の転生者はとても身近にいた。

取り敢えず、排除しない方向で。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（前書き）

展開に捻りがない、一貫性全開。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）

s.i.d.eレン

薬味ファザコン化事件から一年たつた。

あの後、ナギ（アホ）の真実をある程度アリアに話していた事を、薬味が知ったか知らないか、明らかに俺を敵視してきた。

まあ、自分のヒーローが、実はアンチエイコ見ながら呪文唱えての魔法学校中退とか言われたらなア。

別に評価すべき所は評価しただろうが、どっちつかうと、母さん
アリカ王女を尊敬するわ。

それと、アリアが凄い懐いてきた。しつぽがあるならブンブン振つてると、容易に想像出来るぐらいに。

まあ、俺の指導で、自称正義の魔法使いがどれだけ歪なのかは理解した様みたいだ。

転生以前が何歳かは知らんが、基本は誰にでも素直で、可愛いげのある妹だ。

ただ、薬味が俺の悪口を言つた時、いつもでは信じられねエグれエにブチキレた事があった。

俺の悪口に対してキレてへんのは嬉しいんだが、薬味がまるで集団リンクにあつた様な状況になつたア。

それからば、薬味は表立つて俺の悪口を言わなくなつた。

一体どんなチート押し付けられたンだ？

つか、俺が絡むとアリアの沸点がやたら低くなる。そんな好感度上げるよおなことじしたか？

俺は『世界』からのバックアップか知らんが、ほぼ全ての魔法を4歳でマスターした。

欠片フラグメントも、ミッシングリンク級の能力も完全にマスター出来た。

そんな時、

『レン、聞こえるか?』

「あア、聞こえるぜ。久しぶりだな、ビオカしたか?」

『仕事だ。ある程度の転生者の時間軸を捕捉した。今から向かつて欲しいが、構わないか?』

「それが俺が此処にいる理由だからな。今、この時間軸に戻してくれンなら構わねエよ。一応聞いておくが、何時だ?」

『おおよそ、600~400年前辺りだ。』

完璧エヴァンジョン狙いだな……。

「転生者はロリコンの変態ばっかか」

『流石に四歳の体ではキツいだろうが、頼む』

オマエついて、そういう所は氣イ使つよなア。

「氣にすンな。それが俺の仕事だ」

『すまない、では送るぞ』

俺は光に包まれ、その瞬間、レン・スプリングフィールドは消えた。

「ここか……」

俺の意識が戻った瞬間。見たこともない森の中だった。

今はいつだらう、大体ここは何処だ？

「面倒くせH…………もうちとマシな場所はなかつたのかア？」

ザザツ

誰がいんのか？まあいい、取り敢えず姿を消すか。

『『バニユーダースポート』』

「イツは、物体を透明にする能力だ。

認識阻害の魔法と合わせれば、姿を隠すにはもってこいだ。

現れたのは金髪の少女だった。何かに追われたのか、足は泥にまみれ、息は荒かった。

成る程、この娘ガキがエヴァンジエリンか。

……俺も人の事言えねエが。

しかし、原作時では見たこともない程、怯えていた。

すると、H・ヴァンジエリンを囮のように現れる杖を構えた男達。おそらく正義バカか、賞金稼ぎだらうな。

「やつと追い詰めたぞ吸血鬼。この化け物が」

ピクッ

「何で……私が何かしたんですか！？なにもしていないのに…」

「貴様の様な化け物は存在自体が悪なのだー正義の鉄槌を受ける
がいい！！！」

ブチッ

あア、限界だわ。

エヴァンジェリンに攻撃魔法が放たれ、煙が立ち上る。

「フ…………、フハハハハハハ！ 倒したぞ！！ これで私も『立派な魔術使い（マギスティルマギ）』だ！！！ フハハハハハ

「

「黙れよ、ドカスが」

「……？」

イカンなア、アリアの教育上非常にイカンわ。

「だ……誰？」

「ベタな展開になつてきたな。明らかに殺られ役が出てくるなん

『

「な……何だ貴様！？我々正義の魔法使いの邪魔をするのか！？」

「悪いな、明らかに幼女追っかけ回す変態が編隊を組んでやつてきたよオにしか見えねエよ」

さて、判決の時間だ。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（後書き）

ヒロイン募集します。

エヴァー らアスナと木乃香は決定済みです。

馴文ですが、感想待ってます

600年前で初実践（前書き）

四歳児が饒舌で説教……………シユール。

600年前で初実践

sideエヴァンジェリン

私は10歳の誕生日、吸血鬼にされた。

人々からは、化け物と呼ばれ、不老不死で成長しないから、一つの場所に三年は居られない。

ただ見えない刺客から逃げ続ける日々。どれだけ優しくしてくれた人でも、私が吸血鬼である事を知れば、途端に態度が変わる。

私も魔法が使えるれば、幾らかやり様があるけど、教えを乞う人なんて知らない。

そんな時、私は襲撃を受けた。魔法世界の魔法使いが、正義を楯に旧世界に進出してきていた。

勿論私の事も耳に入つたみたいで、賞金を上げ討伐部隊を作つたと、風の噂で耳にした。

その数日後、私は討伐部隊に見付かった。私に良くしてくれていた人が通報したからだ。

私はどうすればいいのだろう。私は誰を信じればいいのかな……？

ついに、私は追い付かれて諦めかけた時

。

彼と出会った。

side out

side

「君ー！ソイツから離れろ！」

（おオ、よオやく田の前にいるのが四歳児と氣付いたか。オマエ等
眼科か脳外科行きやがれ、マジで心配になつてきた。主に頭ツ）

「おオい、大丈夫か？田立つた傷とか無エけどよ」

レンはアホ共にガン無視を決め、エヴァンジヒーリンの傷を診た。

「た…助けて…くれたの…？」

「悪いが偶々だ。そりやア幼女暴行を現行犯で見ちまつたンだ、助
けんだる常識的に」

「ありがとう……つて、私は幼女じゃないよーー君の方こそ幼児じ
やない！」

実際、エヴァンジエリンは姿は幼女だが、今は20歳を越えた辺りだ。反論したくなるのは至極自然。

「聞け！！！」

無視され続けた男は、確実に聞こえるため、大声で叫んだ。

「何だよ、幼女暴行犯のオッサン。刑務所にまでは同行してやるから、今は黙つてお縄についとけよ」

「誤解だ！ソイツは危険なんだ！離れないと殺されるぞ……」

「ハア…………で、ンなコトすんのか？金髪幼女」

「しないよー！だから幼女じやないよー」

（つか誰だ「イツ、さつきから口調が別人なんだが。

ツ！そうか、きっと厨二病感染前か！つまり、今からちゃんと教えていけば、あんなサボタージャー娘になる事もない！）

……レンは、何かエヴァンジョンの将来の事を考えていた。

彼女はちゃんと社会に適合出来る大人になると考へに至つたのが。

その社会が糞の掃き溜めなり話は違つ。

「危険つーけどよオ、こんな金髪幼女の何処が危険なんだ?俺には
アンタ等の方こじよつぽど危険だと思うんだが?(あの様子じじゃ、
まだ何もしてなさそうだしなア)」「

「君はソイツ正体を知らないから、そう思つだけだ!」

「…………やめて」

「正体?」

「わつだ!ソイツは人間じゃない!」

「やめて!」

それは悲痛。

おそらく、初めて助けてもらえた人に聞かせたくないのだ。

レンにまで拒絶されれば、エヴァンジエリンは完全に絶望するだろう。

「吸血鬼！！！それも真祖のだ！分かるだろ？、ソイツは化け物だ！！！」

「へ？、だからソンで何？」

と言つても、レンにしてみれば真祖の吸血鬼だろ？が何だろ？が、害意が無ければ大した意味は無いだろ？。

「……………は？」、「えっ？」

「真祖の吸血鬼ツツンなら、別に人間を襲つて血を飲まねエといけ
ねエ訳じやねエだろ。しかも本人には何の敵意も無い。一体何処に
危険があるツツンだ？」

「だから……ソイツは化け物で……」

「寧ろ人間より高位な存在。敬うのは判るが、化け物扱いとは……
自分より強者は認めようとしない。まあそれは確かに人間の性の一
つだ」

だがな、とレンは続ける。

「残念だが、それは絶対に正義なンてモンじゃねエよ。そんナモン
はただのエゴだ」

少し考えたらわかるはずだ。化け物＝悪、これは絶対に間違つてゐ
とは流石に言えない。しかし、真祖の吸血鬼＝化け物にはならない、
そこに心が有る限り。

レンに言わせれば正義バカの掲げるものは、正義どころか偽善です
らない。

「そ、それは……「オイ、そんなガキの言つ事なんて関係ねエだろ。コイツを殺したら俺達は『立派な魔法使い（マギスティル・マギ）』になれるんだ」

先ほどレンのドカス認定を受けたもう一人の男に至つては、その思考は最早善悪以前に屑だ。

「こんなガキ、まとめて殺しちまえばいいだ」「オイ、其処のドカス。話の腰を折つてンじやねエよ」……なんだとクソガキ！…

故に、負の禁線に触れる。

「ボリュームテかけエ。喧しこんだよピー・ピー・ピーー 轉ずりやがつて、小鳥かテメエは！？」

「なッ、テメエ…………殺す！…」

(おやまア、ガキの挑発で殺す……か。コイツの性根は腐り切つてやがるな)

「待て……その子を殺す理由は無いだろつーやめ

」

「死にやがれ……『雷の暴風』！……！」

自分の欲に溺れた男は、強烈な風を纏った電撃を放つ。

『雷の暴風』もしレンと同い年の子供が受けたら間違いなく死ぬだら。

しかし残念ながら、それが魔法である限り、レンには届かない。

レンに当たる前に、消えてしまったのだから。

「なッ…………！？」

『魔法無力化能力』
マジックキャンセル

始祖アマテル末裔、黄昏の姫御子と同じ力。全ての終わりと始まりの力。

「オマエは殺意を以て俺に接した。だったら殺される覚悟があるんだろ?」

レンは、一瞬で男の懷に入る。魔法は使ってない。

純粹な膂力、其だけで、音速に至る。ソニックブームの衝撃をもろともしない神の肉体。

そして、『神の力』^{フラグメント}。

「『リトルボーイ』」

レン曰く

地殻すら叩き割る拳が、灼熱の爆撃に

早変わり。皆、周りに気を付けようねッ

男は拳を受けると爆散し、肉片すら蒸発した。

「判決、

死刑」

飛んで火に入る夏のバカ（前書き）

修正しました。

飛んで火に入る夏のバカ

s.i.d.eレン

予想以上の威力だったな。リトルボーイでの威力か……。エテンズシード解放したら、マジビッグバン起こせそうだなア。

俺は爆散した屑の事など気にも止めず、もう一人の男の前に立った。

「逃げたり抵抗したりしねエのか？」

「無駄…………だろうな。何かしようとしたら僕はアイツと同じ様になっているだろ？」

成る程、幾らかマシか。生かす価値はある。

「…………討伐隊から元老院の老害共に連絡しin。もしコイツを狙つたりしたら魔法世界ごとオマエ等を潰す、とな」

エヴァンジエリンを指差し、

実際はやる気など更々ないが、ハッタリではない。魔法世界はリライトを研究していくば、おそらく一年で実行出来るだろ。火星そのものを破壊すれば手つ取り早いが。

「…………伝えておく」

男はそう言い残し、この場を離れた。

「さてと、大丈夫か？」

「はっ、はい。ありがとうございます。助けてくれて…………その……」

なんとか、えらくどもるな。

「どオした」

「！」……怖く……ないんですか？私、吸血鬼なのに……

「その話はさしき聽つたろオがよ。そんなモンは関係ねエ、危険度だけだったら俺の方が明らかに高エだろづが」

人間爆碎した四歳児つてのも、恐怖だぜ？

「オマエ、名前は？」

「あつ、エヴァンジエリン、エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルです」

「了オ解。俺は…………」

「このまま本名言つたら不味イよなア。ベクトル操作出来るンなら、一方通行つて名乗つてたンだが。

「…………ブレイドだ。つってもコイツは偽名だ。俺は諸事情で簡単に本名名乗れねエンだよ」

「判りました。……そ、それで、貴方はこれからどうするんですか？」

「フム、確かにこのままエヴァンジエリンと同行してりやア、寄つてきた屑共を楽に駆除出来るしなア。」

『アイツ』せーれを考えて此処に送ったンじゃねーか?

「…………一緒に来るか?」

手を差し伸べると、まるで奇跡でも観たように涙を流しながら満面の笑みで、俺の手を取った。

「…………う、はーつー…」

存外、悪イ氣はしねーな。

その後、俺達は、紛争地域に行き、怪我人やらやなんやらを治しまくつたり、助けした。流石に四歳児の姿はアレなので、『^{ドップベルゲンガ}変身』で姿を12歳くらいに成長した姿でいることにしたが。

そのせいか、「キリストの再来」とか「神の子」とか呼ばればはじめて、漸く自分のやつてたことがキリストセカンドと同じ事だったと気が付いた（。。。）。

そんな俺と一緒にいるからか、エヴァンジエリンも迫害される事は無くなつた。

そして旅の途中

「ブレイド、魔法を教えて！！」

「……それはまたいきなりだア。ンで、何でだ?」

「魔法使いが私達を襲つてきた時、何時もブレイドが助けてくれるけど、いつまでも守られるのはもういやなの。私もブレイドと一緒に戦いたい！それに…………／＼／＼／＼」

「それ[.]?」

「なつ、何でもないよ。／／／！」

「……、そオだな。教えてもイイ」

「本當[.]!？」

「あア。ただ、魔法ツてもただの力だ。力の使い方を間違えたら、あの正義語つた肩共にも成り下がる。ソレを忘れンじやねエぞ。」

「はい[.]」

つて事でエヴァン[.]「エヴァつて呼んで！……エ
ヴァに魔法を教える事になつた。

真祖の吸血鬼のスペックや、元々才能が有つたのか、エヴァはメキ
メキと実力を付けていった。

ラカン強さ表では大体7000くらいはあるだろ？。

更に最近は『マギア・ハレバア』^{ロゼ}を編み出して更に強くなつていった。

エヴァが披露した後に、即『ZERO』で覚えて使つたらかなり落ち込んでたのは、よく記憶に残つてたなア。

ン？俺？分かるわけないだろ？が。大体『世界』の修正力としての力が数字で表現できたら苦労しね。魔法と欠片無しで絶壁走れるしなア。

エヴァがそれなりに自衛出来る様になつたンで、旅の行き先を魔法世界のアリアドネーに移した。

彼処ならエヴァも受け入れてくれンだろ。

ゲート？ンなモン使わねエよ。

それはな・ぜ・か！『王の財宝』の中にティーグレイマンの『方舟』

があつたんだよー！

どうなつてんだ!?と思ひ、中にあるものがある程度調べたら、他作品の道具や武器がわんさか入つっていたのは本当に驚いた。

エヴァのリアクションは、もう何かを諦めた様な顔をしていた。

俺もそオだよ。

で、魔法世界に着いたら又もや災害地区に遭遇。

なんでもメガロメセンブリア…………連合のバカが襲つたらしい。亞人ばかりだったからな。

ジオやらメガロメセンブリアの『人間』は亞人達を人扱いしてねエみてエだ。

この村の亜人達の角は、秘薬になるらしい、時折メガロメセンブリアのバカ共が襲ってきた理由だそオだ。

そのせいで農作物が襲われた時に奪われ、食糧難に陥っていた。

そこで皆の『^{コード・オブ・ザ・ライフメーカー}造物主の掟』。

農作物や資源を片っ端から創つてやつた。かなり適当だったが案外簡単に出来るモンだな。

村人達は、俺達の事を『^{マギスティル・マギ}立派な魔法使い』つった奴は全力で否定したから、『^{マギスティル・マギ}立派な魔法使い』とは呼ばれなくなつた

誰が好き好んで老害に手柄渡す様な事するか。

その後、空氣を読めない馬鹿共が襲来。

馬鹿共にはあの世への片道切符をプレゼントしてやつた。

そして、改めてアリアドネーに向かい、出発した。

俺は、何時でも周囲を『糸』で包囲網を形成してゐる。バニコーダア
スポートで不可視にしたら完成だ。

近くに何かがくれば、糸が震動し氣付くし、最悪転生者なら半径1
0キロ圏内に入ると俺自身が知覚出来る。

そして、遂に網にかかつた転生者^{アホ}が現れた。

見た目は銀髪にイケメン。だが中身の劣悪で、嫌悪感しか感じない。

「（ヒガア、少しの間警戒しろ）」

「（うん、わかった）」

万が一を考えて、何重にも魔法で結界を作る。

バニューダースポートをエヴァに使用。これでエヴァを奴は探知出来ない。

「なッ！？ エヴァの姿が消えた！？」

「本当にアホだな。自ら姿を見せるなんぞよォ」

突如として現れた俺に驚いて思わず後ずさつっていた。

コイツ、典型的なワカメ体质か？

「お前は！ エヴァと一緒にいたガキだな！ エヴァを何処に隠した！？」

「ギャアギャアうつせエンだよ、何の用だ。人の睡眠妨げて迄の用なんだろオナア？」

すると、奴の態度が変わる。慢心と傲慢に溢れた表情だ。

「あ？俺のエヴァを隠しといて、誰に向かって言つてるかわからぬえか？最強オリ主だぜ」

何時エヴァがオマエのモンになつたよ。アリア基準で見てたらダメそオだな。

魔力駄々漏れ、ろくに制御出来てねエな。

「世界に敵性を確認、排除する。オン・アバタ・ウラ・マサカト
(コレ俺の始動キー)」

まずアイツがどんな力を貰つたか確認して、対応するか。

「魔法の射手、連弾・光の1000000000矢」

「ハアツ！？」

後のエヴァは、いつ語る。

旧約聖書の再現がしたかったんじゃない

後の、ソドムとガモラ、である。（プロジェクトX風）

……神話に出てきてもおかしくない絨毯爆撃をしたンだが…………ま
だ生きてンな。

「はッ……ハツ……ま、また死ぬかと思つたぜ……『一方通行』選
らんで良かつた……」

「自分から手の内晒してくれるとはな、転生者はスペックが高くとも、中身はただの素人だからしゃあねエか。」

いきなり田の前に現れた俺に、またしても後ずさる。

ワカメ体質確定だなア。

「ハハツ！ だつたらなんだ！ 僕にはどんな攻撃も効かねえ！！ 蹄め
て俺のエヴァを渡せ！」

「アイツは誰かの所有物じねエよ。…………にしても一方通行かア
イイコトオ聞いたなア『カンダタストリング』」

「>C？」

バミニューダアスポートで不可視にした、無数の斬糸でドカスを拘束する。だいぶ深く切り込み過ぎたか。拘束した後にバミニューダアスポートを解除。勿論意味はある。

当たり前だ。『神の糸』の数値を入力して訳ねエだらうがよ。

「切れねエのは当たり前だ。それを切れンのは神だけだ。テメエ等
転生者風情がどうこりう出来るモンじゃねエンだよ。』

「エターナル・ディストーション』」

「イツは『サイコキネシス』応用し、相手を吹き飛ばす技だ。欠片
は反射出来ねエなら、倒すのは容易い。

「…………クソオー！」

奴はベクトル操作で大気を収束。プラズマを発生させアシヤク
るが『風』フランメントで計算式を乱した

「つかオマエ、風系の魔法とか使われンの分かりきってンのによく
やろうとしたなア」

「グッ……ー！だつたらぶん殴つてやるよーー！」

…………「こりで終わらせるかア。

奴のパンチを片手で止める事で体験、理解した。

「『覚えた』」

「……は？」

さア、判決の時間だ。

一時の別れ

s.i.d.e三人称

「覚……えた……？」

その男にしては、信じられないだろう。天使と名乗る者から貰った力を覚えた等と、信じられる筈がない。

「あア、そオだ。信じられねエか？」

「当たり前だ！！何だその力は！？」

「オマエ等みてエな、チカラア貰つただけのバカには丁度イイだろ
オ！！」

ガンッ！…と、右足を地面に叩きつけると、レンを放物線上に鱗が入り、破片がまるで転生者

男を狙う様に向かう。

男は少し身動きながらも反射でこれを防ぐ。

その身動きが隙となり、

「『ティーンドライブ・F・H』」
フオックスワンド

一瞬で男の後ろに回り込み、音速の数倍の速度で連撃を叩き込む。

「ガツ……何で……反射が効かない……！？」

「オマエの演算能力と俺の演算能力が勝負にならなかつたンだろ」

「そ、そんなはずがあるか！！オリジナルの俺より、偽者のお前が
勝る訳が「なア、ポジティブフィードバックって知つてるか？」ツ
！？」

「正帰還、核分裂なんかに代表されんよオニ、ある反応が増幅促進
される現象……。この意味、分かるか？」

「……？」

「……そして、俺の能力はただ覚えるだけのチカラじゃねエ」

「…………ま、まさか…………！」

「俺が覚えた力は、より高い次元に昇華されんだよ」

相手の力を増幅し、強くして覚える欠片。フラグメント

それがレンの『ポジティブ・フィードバック P.F.・ZERO』の能力。

そう、だからこそレンは『フラグメント 欠片』を求めていた。

転生者達がどのような力を貰つていようが、レンは常に相手より強い攻撃が出来る。

力任せの転生者を倒す事など、造作もない。

「オマエを見てれば大体の力量は分かる。貰つた力は『一方通行』と膨大な魔力、つて所か」

「！」

「図星みてエだな」

「つるせえーー！」

男は、ただ力任せに突っ込んでいく。それ以外の努力などしていいのだから、方法はそれしかない。

冷静に考えたら、分かる筈なのに。

一方通行に力任せが通じないのは、その男が一番わかつていった筈なのに。

男の拳は、レンの体に触れた瞬間、反射され、右手首が折れる。。

「ぐあああああああ……！」

「貰いモンのチカラなんかじやねエ。努力を積み重ねて手に入れた力だったら、俺に勝てたろオなア」

「ぐあああ……クソ！クソクソクソ……何でだ……どうして……。
俺は最強のはずなのに……ツ……！」

「オマエが力に慢心せず、それを高める努力をしたら……最強になれたかもなア」

男の足下から、熱を奪われている様に凍つっていく。
「か、体が……凍つていく……！？」

熱エネルギー吸収能力 などと、レンは言わなかつた。必要
がないからだ。

レンの掌に、吸收された莫大な熱エネルギーが収束されていき、
「い、嫌だ……死にたく」

男の目の前で、放たれた。

「悪イなア

」

「 誰工敵に回したか、分かつてンか？オマエ

『第四波動』。

数日後、二人はアリアドネーの魔法学校にたどり着いた。

「此所がアリアドネーか……。エヴァ、入学手続きすンぞ。」

「うん。でも、私ここに入学する意味あるのかな?」

「あア。ここに卒業生になる事が重要なンだよ。そうすれば、最低アリアドネーとヘラス帝国から危険視されることはなくなる。吸血鬼の真祖だろうがな。メガロメセンブリアの魔法至上主義バカは兎も角だがなア。」

彼処は、あれは最早狂つてると言つてもいいだ。とレンは付け足した。

アリアドネーは学ぼうといつ意思をえあれば、犯罪者でも受け入れてくれる。

自分がいなくなつても、抑止力になつてくれると信じて。

理解者になつてくれると信じて。

「ブレイド。お願い事が有るんだけど、聞いてくれる？」

「何だ？厨一病発病権は絶対に駄目だぞ。」

「パクティオ
仮契約して」

「…………いきなり何だ？」

「ブレイド、行っちゃうんでしょ」

「…………」

「だから自分がいなくても、私に味方になってくれるから、アリシア・ダーネー此処に来たんでしょう？」

「…………あア、そうだ」

この時代にもう転生者はいない。

レンは最初の転生者の襲撃に、近距離に複数の転生者も確認した。

エヴァが寝ている間に、結界を張り、潰しに行つておいたのだ。

エヴァにも、絶対ではないが、ある程度の安全も確保できた。

故に、この時代に留まっている理由はなくなった。

「よく……分かったな」
「何年一緒にいると思つてゐるの?…わかるよ」

「……そオだつたな」

「だから、ブレイドとの繋がりが欲しいの」

「なんかエロいな」

「真面目な話してんだよ／＼＼＼＼＼？」
つてば、変な所で……「レンだ」……<？」
たぐブレイド

「レン・スプリングフィールド。これが俺の本当の名前だ」

「……………」 植田が口をつぐんだ。その代り、

「嫌が心でも仮契約すンだろ? だつたら隠してる意味はねエ」

「… フフフッ、よく分かつたね」

「何年一緒にいると思つてんだよ」

「そうだったね」

二人とも笑い、そして理解者として認め合えた。

魔法陣を書き、準備を始める。

「エヴァの血つてすぐ蒸発するけどよ。仮契約には問題なさそうだなア。シヒ、出来た」

「.....(ジテミ)」

レンはナイフを取り出し、宝石に血を垂らすが、

「ほれ、ナイフδんむッ / / / / ! ?」

次の瞬間、エヴァはレンの頭を奪っていた。

「んむ.....ふはッ...ん、かわいいやつだ」

「グハアツー！／＼／＼／＼

「エヴァー！？」

エヴァの、出血による失神

は置いといて。

レンの前に、光に包まれた扉が出現する。

「敢えて言おひ……倒れて悔い無しとー！」

「オマエ誰に向かって言つてんだ？…………つたく、じゃあ行くぜ。」

「うふ。また……余れるよね？」

扉は開かれ、光がレンを包んでいく。

エヴァの眼は、不安ながらも仮契約カードを握りしめ、確かに道を観た眼だつた。

「立ち止まんな、歩き続ける」

そう言い残し、霧の様に輪郭がぶれ、そして何時しかレンは消えていた。

エヴァは、音では聞こえない言葉をカードを通して、確かに聞こえていた。

ンなモン、当たり前だろが

。

一時の別れ（後書き）

ヒロイックアンケート募集しています。

現在、真名一票

刹那一票

千雨一票

アキラ一票

刀子、シャークティ、しづな先生陣
。

確定者 アスナ 木乃香 エヴァ。

大分裂戦争へ（前書き）

ちょい無理矢理感が出でますが、勘弁してください。

大分裂戦争へ

s.i.d.e三人称

「何でまたここにいるんだよ。」

光を抜けた先は、レンにとっての始まりの場所だった。

「御勤め御苦労様、と言いたいが。仕事だ」

瞬間移動の様に管理者は現れた。

「早エよ、別に構わねエけどよオ。ソレが俺の存在理由みてエなモ
ンだからなア。」

「働き者の部下がいて助かる。まあ、残業手当てなら用意している。
右手を見てみる」

「...「イツは...令呪...！」

レンの右手に刻まれていたものは、確かに令呪だった。

「これでサーヴァントを喚べ。今後は特に戦地だ、一人は辛かるつ。
精神的に」

「サンキュー。…………で？本題は？令呪を渡したいが為に懃々呼ンだ訳
じゃあねエだろ」

「ああ、実は君の魂が神格化してきたのだ」

「…………
はア？」

「ザ・ワールドツ！ 時止まるツ！」

「いや、元々素養が有ったのだよ。私が抑止力にしたのがだめ押し
だつた様だ」

「イヤイヤイヤー！抑止力が神格化ってビオいう事だア！…あり得ねエだろ理屈的に…！」

「ハツハツハツ」

「ハツハツハア！？華麗エにスルーしてンじゃねエー！…あまりの展開に誰もついてけねエよ…！」

「嘘だ」

「エテンズシード解放オオ…！」

レンの右腕に『聖痕』^{ステイグマータ}が浮かび上がる。

『第五波』「君がとある神の性質を帯びてしまったのだよ…なんだト？」

「つまり、転生者、ブチ殺してる抑止力としての俺じゃなく、レン＝スプリングフィールドとしての魂が神格化しただと？何でそんな面倒クセエ事になつてんだ。神つてのは信仰されねェと生まれねエンだろ？」

「君は中々の善行をしただろ？君に助けられた者は『神の再来』と崇めらりて……そんな嫌そうな顔をするな」

「すンに決まつてンだろ？が

レンにしてみれば、頼んでもいの人に人が勝手に崇め、そのせいで自身が変革してしまつたのだ。

自業自得と言えばそれ迄だが、レンにとつては迷惑千万である。

「あんなモン只の自己満足だ。」

「君にとつては自己満足でも、助けられた者はさう思つてはしない。ただそれだけだ」

「……チツ、クソッタレが。で、なんか変わンか?行動が制限されるとかよオ」

「君は欠片フラグメントを持つと同時に、神格者としての力も持てる。喜びたまえ、パワーアップだ」

「これ以上強くなる必要あンのかよ……。で、ビンなチカラなんだ」

「ア

「君が神格者として名乗る迄ハシメテ」とてそれは決まる。ま、基本は封印状態で落ち着くが

名前ねH……、と、レンは暫く考えた。

「……決まつたぜ」

「ならば聞いフ」

「我王紀士猛速淒乃男命、てのはビオだ？」

レンが名前を言つた瞬間、レンの中に何かが生まれた。

「あらゆる魔の根源……か。やはり君は発想力が凄いようだ。いや、妄想力が「叩き潰すぞ」…フツ、冗談だ」

もし直ぐ様訂正してなければ、管理者が一人不在になる所であった。いやマジで。

「次の時間軸は……って大分裂戦争時に決まってンだろうなア。
絶対」

「ああ、JIIJが一番の踏ん張り所だ。頑張ってくれ」

「ハア……。面倒だ」

「しかし……、何故凄王にしたんだ？ 態々、究極の魔など」

「……人間つてのは、話したら皆が判り合える、なンて事は絶対に有り得ねえ。これは真理だ。」

レンは、人の醜さを前回の仕事場で良く理解していた。

解り合える者もいるが、世界にはそういう醜い人間もいる。

「人を動かすのは恐怖だ。そして、人にその愚かさを気付かせるのも恐怖だ」

優しさで理解してくれる者には救いを。

理解出来ぬ程の愚か者には絶望をくれてやる。

それが、今のレンの精一杯の答えだった。

「思い上がつてんのは、解つてるがよ……」

「……君は、人間に絶望したのか……？」

しかし、レンは振り返らない。ただただ、その小さな背中を向けた
ままだ。

「ハツ、ンな訳やねエだろ」が

しかしレンは、笑っていた。

「その希望を魅せてくれた奴を俺は、少なくとも一人。知ってるぜ」

「…フツ、そうか」

エヴァとの仮契約カードを見せ、そう言い残すと、レンは光の扉をくぐり抜け、新たな仕事場に向かつた。

扉をくぐると、そこは戦場だった。

「幾らなんでもいきなり過ぎンだろ。」

こんな両軍がぶつかり合つてゐる真ん中にブチ込まれれば、人間そ
うなるだろ。

兵士達は「何だコイツは?」「どうせ帝国だろ」とこいつ、レン
に襲ついいかつてきた。

「..... a y u f s c y d k 死 L g p u e a」

戦場に現れた一人の少年が、そう呟いた瞬間、

世界全ての生物を一瞬で殺し飛ばせる程の死ノ恐怖が、世界に溢れ
出した。

sideナギ

前線で敵を蹴散らしているとアルが声を掛けてきた

「本陣から左翼へ行けという指令が来ましたよ。ナギ」

「何でだよ？」

「どうやら帝國からの援軍が来たよひです」

「わかった。わざわざ俺を遣わすところじとせよみどり強こんだろ
うな。ワクワクしてあたせ！」

「はあ、お前つて奴は」

近くで話を聞いていた詠春が、何か言つてるが関係ねえ

そう考えた時。

ズドン！――――

と、体が悲鳴を挙げた。本能が、此処から逃げないと叫ぶ。

どうやら戦場にいる人間全てが同じ様だ。

「何、だ…これは…ッ…?!?」

詠春が咳いたら、空から千の雷とは比べものにならない巨大な雷、
が前線に落ちやがった。

「アアアアアアアア…!!…!!と、余波が此処まで届いた。

「くつ…！…、オイ…!!行くぞお前等…!!」

急いで雷が落ちた所に向かう。

其処にいたのは、

そこに在るだけで、死の恐怖を撒き散らす魔の神がいた。

大分裂戦争へ（後書き）

ヒロインアンケート途中経過です

真名一票

楓一票

千雨三票

アキラ四票

夕映一票

先生陣四票

確定者 アスナ 木乃香 刹那 エヴァ以上です。

後、アチャ子の資料を探しています。これは知ってる人がいたら、教えてください。

死の恐怖

s i d e レン

力を解放したら、兵士達が地面に膝をつき、震え、動かない。

まあ当然だろ。

凄王の特性は異能。ありとあらゆる異能の源。そして究極の魔、真の武、死と破壊の神。其処に在るだけで死ノ恐怖を撒き散らし、死ぬ可能性が有る生物は死ノ恐怖から逃れられない。

力の制御出来なかつたからダチできなさそオだな。どオでもイイが。

てか髪長ツ！殆どナマハゲみてエじゃねエか！！

まア、おかげでんま顔分かんねエからイイがよオ。

後で切るか。

トンツと足で地面を叩く。

それだけで通常の数億倍の大きさの雷が落ちる。

それで、前線に出てきた連合と帝国の兵士は、轟音と共に一掃された。

あア？無理矢理徴兵されたっぽい奴ア殺してねエよ。

「さてさてH、こんだけ派手にやらかしたら「…走れよ稻妻、千の雷…」…………ほオら来たア」

さアて、力試しといこつか？新旧世界最強オ。

ナギ達がとつた行動は極めてシンプルだった。

ナギは千の雷、ゼクトは燃える天空、詠春は真・雷光剣、ラカンは核兵器並の威力のある気弾、それを直撃させる為、アルの上空からの重力魔法。

それぞれが、乙のが持てる力の全てをこの不意討ちに賭けたのだ。

それは外したら負けと直感したからこそその行動だった。

しかし。

バチン！！

その全てを、少年は片手を無造作に振つただけで弾き、かき消された。

しかも、重力魔法と千の雷は弾かれた瞬間消失。燃える天空に到つては吸収された。

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

その弾いた腕すら傷一つ付いていなかった。
紅き翼の面々は、全力で距離をとった。

少年は両手を挙げ、

「カカツ」

瞬間、空が八匹の龍に埋め尽くされた。

s i d e 詠春

これは一体何だ！？

自分たちの全身全靈を込めた一撃を簡単にかき消し、上空全てを覆い尽くす程の龍を喚ぶ。

こんなもの、神話にしか聞いた事がない。

「何だ……これ……！？」

ナギが呟きアルビレオも口を開く。

「あの八匹の竜は一体か！？ゼクトー！！」「...竜ではない」！知つてゐるのです

「あれは上空に集まつた莫大な氣、魔力じや。その世界を包む程のあまりのエネルギーが行き場を求め、龍の形に見えるだけじや。しかも竜でわなく龍。こんな事が出来るのなど…… 神だけじや」

神話に出て来る……………竜でわなく、龍。ツ――――

「太古の昔、旧世界にこの世にたつた一人だけ神が存在した、といふ記録がある」

「神だと……？」

「ああ、そうだラカン。魔法を含め、ありとあらゆる魔の根源とされた存在だ。そして、その神は三つの事象を司る神だったといわれる」

「三つの事象… それは？」

「武と破壊と…………死の神だ」

そう、人間がビリーハーで見る存在じゃない…………

その時、気付いた。

さつき返そこにいた奴がない。

ちゃんと警戒していたはずだ！？

そう思つた瞬間、

ザワツツ！……と、身体中が危険信号を挙がり、後ろから声が聞こえる。

「H、わざわざ説明じ」苦勞様ア。

そこで私の意識は途絶えた。

side out

何をされたか分からなかつた。各々が最強クラスの名に恥じぬ強さを持つていた紅き翼が。

サムライマスターと呼ばれる青山詠春は瞬殺。

この事が、当時十数歳のナギを突き動かした。

「て、テメエ！……」

「待つんじゃ！……ナギッ！」

不老で、メンバーの中で多い知識と経験を持つゼクトは、目の前にいる『モノ』が何なのか。その危険性を正しく理解していた。

「オオオオーーーー！」

ナギは『ナニカ』に殴りかかるが、

トンッ、

突っ込んだ筈のナギの胸に、『ナニカ』は手を置き、呟いた。

カツ！

『燃える天空』と比べられない、極大な熱線がナギを包み、吹き飛ばした。

「ナギ！チクショウツ！」

ラカンは、自身の最も巨大な武器、斬艦剣で斬りかかる。

だが、『ナニカ』に近づいた途端、斬艦剣はバターの様に削り取られた。

「……！」

知っている。

これは、『完全魔法無力化能力』だ。

「…………力 p n t x e」

ラカンが理解したと同時に、ラカンは殴り飛ばされた。

カツ消されたと表記した方が正しいと思えるほどの威力だった。

空中に立つた『ソレ』は右手から緑色の槍の様な炎を作り出した。

「雷霆rēkīmēpw槍」

問題はソレに込められた魔力の量だった。

あり得ない。

この世に現存しているどのような存在を愕然、呆然させる程の魔力で作られた槍が、投撃される。

ゼクトの『クラティスター・アイギス最強防護』は、紙切れの様に破られ、その戦場を消し飛ばした。

勝敗、などという話ではなかつた。

sideレン

一応、親父殿には勝利したンだが…………。あれは勝負になつてた
か？

残りは、龍眼で觀て、屑以外は生かした。連合の正義バカは論外だ
かな。

『龍眼』は、物体、事象、存在。これ等全てを『觀る』事が出来る。
人の死や、未来さえも。まあ精神力がないと発狂するが。

次はどうすつかな…………。そオだなア、アスナに会いに行くか。

龍眼で世界を観て、移動する。

その戦いは帝国の勝利に終わった

いや、正確には帝国側が生き残りつた。が正しい。連合側は、ほぼ全滅。紅き翼は文字どおり蹴散らされた。

生き残った帝國軍はこの事を、体を震えてさせながら報告し、帝国の皇帝は戦慄した。

両軍ほぼ全滅。

全兵が全員死傷した訳ではない。その圧倒的な死の恐怖で戦意が、

戦場¹」と殺し尽くされていた。

それを行つたのが、見た目5、6歳の少年だったという事も理由の一つだが、

500年前に、「神の再来^{ザ・セカンド}」と呼ばれた人物とその少年の特徴が合致しており、更に少年が放った死ノ恐怖が王宮、そして全世界迄届いていた事で皇帝を震え上がらせたのだ。

戦争を起こし、大勢の被害者を出した事による、神の罰か。はたまた世界の終わりの前兆か。眞実を知る者は、その存在しか知らない。

その日から、世界はその少年の事を畏怖を込めて『禁忌^{インセイ}』と呼んだ。

死の恐怖（後書き）

アンケート途中経過ッ！！

千雨 九票

アキラ七票

真名六票

茶々丸二票

夕映一票

さよ一票

裕奈一票

楓一票

のどか一票

まき絵一票

先生陣四票

スゲエ、千雨さん一番人気ですね。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァ です。

アンケートや感想、こうしたら面白くね？といつ意見もどしどし募集しています。

黄面の姫御子（前書き）

ちよへへへへ 短め。

黄昏の姫御子

黄昏の姫御子

s.i.d.eレン

今日、俺はオステイア最深部に来ている。

何でンな所いるかとこいつと。

「ダレ?」

アスナのところに来てる。

にしてもマジ無表情だなアオイ。しかも鎖に縛られて、口元には血
とは。

やつた奴蒸発させるかア、物理的に。

「オマエ、名前は?」

アスナの血を拭き問う。

「アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュ
シア。アナタは？」

「俺はレンだ」

よし、まずは感情を取り戻すか。…………アスナが「レン…………」つ
て呟いてる。これは大きな一步なんじゃねエのか？

「レンはナニしにキタの？」

「人形みてエな奴をバカみてエに笑いさせに来ただけだ」

そう言うと不思議そうにしていた。

「ミノナはワタシの力をコワがつてちかづいひとつしないのこ」

「…………魔法無力化か、ハツ」

俺はサギタ・マギカを一発誘導させて自分にぶつけ、消す。

「…………あア、俺もだ」

sideアスナ

目の前の少年の行動が解らない。

現れたらワタシを人扱いし、縛っていた鎖を壊してくれた。

何故？

他の人の様に、道具扱いや、怖がりもしない。

「ミンナはワタシの力をコワがつてちかづこうとしないのに」

すると彼が笑い、魔法の射手を自分にぶつけ……消え……た？

すると、彼は苦笑しながら信じられない言葉を言った。

「…………あア、俺もだ」

……え？ワタシと同じ…………？

彼がワタシの頭を優しく撫でてくれた。

……暖かい。

解らない、分からぬ、判らない、ワカラナイ。

それでもワタシは嬉しくなつた。何でだろ

ワタシは無意識につなづいていた。

そうしたらレンは微笑みながら、ワタシの頭を撫でてくれた。

なんだか、胸がすごくぽかぽかしてきた。

ワタシが昔、なくしたもののが戻つてくる気がする。

なんだろ？

すると、誰かの足音が聞こえてきた。

「時間か……」

「行のひきもつのか？」

「まあ、そオなんだがよ…… オマエほびいすんだよ。」

「ワタシ？　ワタシは……　ワタシも一緒に……！」

「でも、ワタシみたいのが一緒だったら……　彼も嫌がるに決まってる。」

「……ハア、なんとかデジャブってンな……」

そう言つと、彼はワタシの手を取つて立ち上がりてくれて、

「…………なにやつてんだ、行くぜ」

「え……？」

「言つたろ？」「が

「…………笑わせに来たつてよ」

ワタシを外に、連れ出してくれた。

黄昏の姫御子（後書き）

アンケート途中経過ッ！――！

千雨 九票

真名八票

アキラ七票

楓三票

茶々丸二票

夕映一票

さよ一票

裕奈一票

のどか一票

まき絵一票

先生陣四票

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァ です。

アンケートや感想、いつしたら面白くね？といつ意見もどしどし募集しています。

女性のカンは世界一。（前書き）

ノクト）アチャ子はちゃんと出しますよ。いや、正確には出でています。これヒントッ！

レン）ヒントになつてねエだろオガがよ。ハツキリに言えよ、アリ『
アウトオオオ！』

女性のカンは世界一。

s.i.d.eレン

今、俺はアスナと一緒に方舟の中にいる。

理由は単純、サーヴァントを安全に召喚する為だ。

『アイツ』から折角の残業手当を貰つたんだ、使わねエと頑張つた甲斐がねエ。

一応セイバーかキャスターの、トップクラスの英靈のはずだ。

英靈は誰かを指定するつもりはねエ。まあ、アヴェンジャーか某ジヤンヌ信者のクソ野郎以外なら基本構わねエ。

後は野となれ山となれだ。

因みに、アスナは寝ている。三徹してなかつたンじゃねエか?と思つ程熟睡してる。

「 - - - 鎮せ鎮せ鎮せ……、英靈の座に在る、まだ見ぬ俺の使い魔！！間違つた望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ！！！その力の全てを俺に託してくれンなら、テメエに俺の命運を託してやる…」

「 - - - 来やがれ！！我が天秤の守り手よーーー！」

召喚の正しい詠唱なンび知らねエから、省いといた。

さて、どんな奴が召喚出来たかねエ。

俺の目の前には - - - - - 、

「は？」

な金髪を持つた少女。

青セイバーもとい、ズタボロ虫の息状態の - - - - - 、

- - - - - アルトリア・ペンドラゴンがいた - - - - - 。

待て、落ち着け俺エ…。

サーヴァントを召喚出来たのはイイ。まだ理解できる。

何故に血塗れエ！？

勿論そんな状態で放置するのはアレだったから、フラグメントの『治癒』と『変身』、『一方通行』、更には『龍掌』を同時発動させ、治療している。

シユトローム風に云づならば、『閃華烈光拳』つてトコかア。

していいつつても、既に傷の修復は完了しており、俺のベッド（方舟の中の）に寝かせて、後は意識を回復するのを待ってる所だ。

ま、治療系の異能を総動員したンだ。それで『助かりませんでした。』『じゃ済まさねエヤ。

「ん……レン？」

「アスナか。悪い、起こしちまったか。」

隣のベッドで熟睡していたアスナが目覚める。

本当は部屋も別にしたかったンだが、全力で拒否されるとは思わなかつた。

「その人は？」

「俺のサーヴァント、……の筈なンだがなア」

「サーヴァント？」

「特別な従者兼使い魔みてエなモンだ。」

「そう、……」

長門有希みてエな反応だなオイ。

にしても、…………まさかアーサー王が出てくるとはなア。

『…………間違つた望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ！－！』

……絶対アレが原因だなア。

しかし、彼女は協力してくれんのかねエ？ここには願望機は無い。有つたとしても、あンなフザけた願いを叶えさせる気もサラサラ無エ。

……さアて、どオすツかなア。

「…………う…………ん、私は……」

どうやら、Hサマはお田覚めの様だ。

「よオ、田H覚めか

「HJは……？」

少々虚ろだが、意識的はあるな。

体は『一方通行』で触れていれば検査ができる。無論、問題なンでねエ。

「あー、『魔法世界』と呼ばれる火星に位置する異世界だ。ちなみにここは俺のアジト。ぶっちゃけ並行世界だ」

「わたしは……死にかけていた……いや、死んだはず」

ホントな、お陰でとんだバカ面晒しちまた。

俺にとつては虫の息でも、他の医者なら投げ出してただろオからなア。

死んだら死んだで『反魂』で生き返らせるが。

反魂は死体が腐敗してよオが、大体一ヶ月以内なら蘇生可能だがなア。

無闇やたらと使いたくねエがなア。

「貴方は？」

「レンだ。オマエを召喚したマスターの篱だが？」

右手の令呪をみせる。

「そうですか……。しかし、私の記憶は所々が混乱しています。おそらく……」

「チカラ技召喚だったから、不具合が生じてしまったかもな。パスもズタズタだろ」

「ええ、不確定なパスで魔力が途切れ送られてません」

うつわ、マジ衛宮くん状態。

ま、魔力パスぐれエ、仮契約でどうともなんだろ。

誤解が生まれそうだから訂正入れとくが、血による仮契約だ。

キスなンぞ、やらかしちまつたらエクスカリバーで真っ二つにされ
ちまうわ。

見た目14歳でも、精神年齢100越えてンだぞ。

エヴァ思い出すわ。

つか、仕事始めてから肉体と実年齢が合ってる仲間がいねエ……

エヴァ、アスナ、アルトリア、俺。

年齢不詳にも程がある。

「ムツ、何か失礼な事を言われた気が…………」

その直感Aは、絶対ギャグ補正はいつてるよな！

「激しく同意。」

ブルータス（アスナ）！オマエもかアアアアアツ！！！

「 - - - - - ハツ、何かレンに馬鹿にされた気が！？」

真祖^{エヴァ}のスペックは廢が付く。

女性のカンは世界一。（後書き）

千雨 十票

真名九票

アキラ八票

楓四票

茶々丸二票

夕映二票

さよ一票

裕奈一票

のどか一票

まき絵一票

先生陣五票

(。 。) 千雨パネエ……。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァ。

アリア、アルトリアも入れるか迷っています。

アンケート待つてます!!

対面（前書き）

アルトリアのヒロイン化が決定しました！！！

s i d e 三人称

「丁度アンの親父は、母さんと会つてゐる頃だろ」^{アボ}

アルトリアを召喚して数ヶ月経つた。

アルトリアの仮契約は後回しにし、まず受肉させてからにする事に決めた。

受肉方法は、もう色々有つて忘れていたがレンの体は『アダム』なのだ。つまりは神の現人であり、キリスト以上の『救世主』なのである。

つまり、レンは『攝理代行者』としての価値と、神の肉体としての価値があり。おそらくその肉体の価値は、『使徒』^{アポストロフ}にと同等以上。

その肉体の一部を媒体として使えば、英靈一人の受肉など容易い。結果、

- - - - ぶつちやけ俺の血イ飲ましたらいけンだろ。

とこつ方法を揃る」とこした。

キャスタークラスの魔術師が居れば、こんな適当案を出さなかつたが、生憎レンに魔術知識は無い。

仮にメディアがレンの存在を知つたら、卒倒間違い無しだ。

「レン」

レンの側にいるアスナが常にいる。そのレンに付いてくる姿は、仲のいい兄と妹に見える。

服装は、長年着ていた儀式服ではなく、普通の女の子のそれにしている。

そんなアスナを、体感時間で50年ほど会っていないアリアに重ねてしまうのは、しょうがないのではないか。

レン達は、紛争地域や戦争で傷付いた人々を治したり。また、連合による理不尽な襲撃に会いそうな村々を回っている。

レンは、まるで何時ものようにと言わんばかりの手付きで、怪我人達を片っ端から治していた。

レンの治療法は二つに分かれている。

体の一部が欠けていない傷に対しては『龍掌』を使う。

龍掌は、対象者の気、魔力を使い自己治癒能力を限界まで強化し、治す。

端から見たら、ただ殴つただけで傷が消えている様に見えるだろう。

体に欠損がある場合は、『変身』か『治癒』の欠片を使い再生させ

る。

龍掌と違い、レン自身に負担はあるが、全人類を一から造り出したとしてもレンにとつて『負担』にはならない。

しかも、それは人間に對してのみで、魔法世界人は『リライト』で事足りる。

下らない正義を掲げ、自分の行為は正しいと思い込んでいる愚者に對しては、圧倒的な力で蹴き払う（余りの馬鹿さ加減にキレ、半凜王化）。

そんなの姿に、アルトリアは思わず見惚れ、時が経つにつれ興味を持つた。

何故この人は、これほどの力を持ちながら、自分の欲の為ではなく、人々の為に振るえるのか？

アルトリアが聞いてみたら、

「…………ただの自己満足だ。意味なソトでねエ」

(フフツ、不器用な人ですね)

アルトリアはまだ、レンに惹かれ始めている事に気付いていなかつた。

「そオだ、アスナ、アルトリア。遊びにでも行くか?」

「うん」

『はい、構いませんよ』

だからアルトリアは迷つてしまつ。

自分はこんな幸せな日々を送っていて、良いのだろうか - - - - -。

「これ何?」
「アイスクリームつつうんだよ。食べるか?」

「うん」

「……平和、ですね」

「だな。仮初めの平和でもイイモンだな」

レンとアスナは、行き掛けに紛争地域と災害地域を鎮圧し、復興させてメガロメセンブリアの下町に着いた。

実体化したアルトリアもいる。

アルトリアの服は、第四次聖杯戦争で着ていた黒スーツだ。

まだ魔力パスは完全に繋がっていないため、最強クラスとは1・2回しか戦えないだろうが。

『グレーントグラヌスター最後の鍵』^キで転移すれば、もつと早く着いたが、態々そんな回り道をしたのは、アルトリアとアスナに魔法世界の現状を見て欲しかったからだ。

「……」

「記憶、戻りそつか？」

「…はい」

（少しおひがり、この数ヶ月で、何か記憶を取り戻しつつあるようだ。

（少し沈んでんな。まあシアねエだろ、あんな人生じゅア）

アーサー王は、最も有名な悲劇の王だ。

他国に滅ぼされたのではなく、自國に滅ぼされた。

14歳の少女が國の為に身を捧げたといつのに、捧げた國に敵対され、最後には自分の息子に殺された。

その記憶を取り戻すのは苦痛だろ。

最高の騎士と呼ばれた、あのサー・ランスロットがバーサーカーになるのだ。

相当なものだらう。

だから、アルトリアは聖杯に願つたのだ。

やり直しを。

「果たしてその願い先に、オマエの幸せは在ンのかねエ」

『.
』

「戯れ言だよ」

無理矢理の話題転換により、話を終わらす。

ソフトクリームを食べ終わり、いくつか服を買って、また街を歩いている。

まだ昼過ぎで賑わっているが、そろそろレンは帰らうとした。

「……一いつ。」

「つおつ、悪イ！」

大量に荷物を抱えた人にぶつかる。

（つか、相手側の顔が見えねエンだが。フード被つてゐるのもあるが、持つてる荷物が矢鱈多いなオイ）

反射をデフォで設定している為、向こうは結構痛いはずだが、平気のようだ。

実際余り大した力でもなかつたのもある。

「馬鹿者！人とぶつかる奴があるか！！」

「ハア！？誰の荷物のせいだとおもプツ！？」

男の連れが、レンがかつて見た事が無い綺麗なビンタを決めた。

それの影響で、一人のフードが脱げる。

「……………何イチャついてんだ、ツンデレ王女に
あんちよこ」オ

「！？」

「……………何者じや。そしてシンデレラとは何じや

「そしてイチャついてねえ！」

二人……、ナギ＝スプリングフィールドと、

アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは身構え、警戒する。

対面（後書き）

アンケート途中結果ツ。

千雨 十二票

真名十一票

アキラ九票

楓五票

茶々丸五票

さよ五票

夕映一票

裕奈一票

のどか一票

まき絵一票

先生陣六票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリアです。

アリアはまだ思案中なので、アンケート待ってます。

ちなみにヒロインアンケートは、主人公が現代に帰る迄とします。

s i d e = 三人称

一触即発。

レンの前にアルトリアが立ち、服は変わっていないが間違いなく不可視の剣をナギに向けている。

ナギもアリカを守る様に前に立つ。

「…………」

「…………セイバー、切つ先下げる。」

「…………判りました」

アルトリアが切つ先を下げるでも、状況が変わるわけでもなし。
緊迫した空氣の中、レンが話を切り出そうとした時、

「ナギ」

「姫子ちゃん？！」

「アスナ！？」

そこに爆弾アスナが投入された。

アスナは片手にアイスクリームを持ち、食べている。

「オラ、物食つてる時は喋つたらダメッつってンだろ？が。行儀悪
イ」

「ゴメン」

「…………数ヶ月間前、アスナが誘拐されたと聞いたが、まさか、
お主が？」

アリカがレンを睨む。

睨まれるのは当たり前だが、レンとしてみれば、母親にそんな視線を向けられて、いい気分ではないだろう。

しかし、そんな視線を遮る様に、アスナが立つ。

「姫子ちゃん……？」

「違う」

「！？」

アリカは、アスナから聞いたがことがないぐらい力が籠つた声に驚愕する。

「レ…ブレイドが無理矢理私を連れて行つたんじゃない。私がブレイドについていったの」

「だから『フレイド』にそんな眼を向けないで。」

「…………」

アリカが顔を悲痛に歪める。

おちりく罪悪感からだらう。

『（……滅茶苦茶饒舌に喋つてんなア）』

『（無論です。数ヶ月とはいえ、私が教育したのですから。元々、飲み込みが早かつたですし）』

『（流石騎士王サマ。帝王学とか無敵じやね王の？）』

念話でそんな会話をしていると、ナギがレンを見て気付く。

「お前……まさか、『禁忌』^{イフセイ}かー？」

「何じゃヒーーー？」

その一つ名を聞き、レンが頭を抱える。

「……なんだその厨一感溢れる一つ名ナミトイのは?まあ多分俺なん
だろオガ」

「厨」「?」

「オマエにやまだ早エよ、アスナ」

「わかつた」

ナギは今だに警戒しているのか、分かりやすいくらいに魔力を昂ら
せている。

「……ナギ、勝てるか?」

「無理だ。皆が居た奇襲でも手も足も出なかつたからな。」

警戒するのも当然だつ。敵意が無いからか、次元が違はずぎるの
か。アリカにはナギの感じている絶大な圧を感じない。

「……へエ、力ばかりのアホだとばかり思つてたンだが。存外、まと
もな神経もあるンだな。見直したよ。」

一対億でも愚の骨頂。

一対一など正氣を疑つ。

全新旧人類が相手をしても、レンにとつて物の数ではない。

更にそこに世界最強の剣が加わるのだ。

万に一つも勝機は、生存率は無い。

「……黄昏の姫御子を返して貰えぬか

「フザケンな。連れ戻してどうする?また兵器扱いして鎮に繋げん
のか?」

レンの言葉に微量な怒氣が含まれる。

アリカでなく、元老院が言つた言葉なら最低の死は確定だ。

「……ならば、諦めるしかない。紅き翼でも勝てんのであれば、今戦つても意味は無い。それより、『完全なる世界』を倒す為に、戦争を止める為に手を貸してはくれぬか？」

「オイ、姫さん！」

「黙つている。……主の力量は大体分かる。あの大規模戦闘を一人で止めたほどじや。その力、この戦争を止める為に貸してくれ」

おそらくレンは『完全なる世界』の事も知つてゐると、アリカは判断した。

「…………ハツ、戦争、を止める為ね。」

レンは一瞬、呆れたような顔をして、鼻で笑う。

「何が可笑しいのじゃ」

「笑いたくもなるわ。戦争を長引かせた奴が、戦争を止めたいと努力する奴と一緒にいるとはな。」

「…………何じゅう？」

「アンタさア、『ハイツワ紅毛翼』のせいで戦争が長引いたって事を分かつてねエのかよ」

「なんだとー？」

レンの言葉に、流石にナギも聞き逃せなかつた。

当たり前だつて、自分達が遣つたことが全否定されたのだから。

「そオだろオが。オマエ等紅き翼がいなけりや 帝国は勝ち、戦争は終わつてた、違うか？」

「なつー!? そんな事をすれば、連合は滅びていたじゃねエか！」

「イイじゃねエか。オスティアを除き、元々魔法世界は亞人たちのものだつた。そこに土足で上がり込んできたのは旧世界人だ。」

「それを、我が物顔で亞人達から資源を搾取する馬鹿がどうなるオメガロメセンブリヤが知つたこつちゃねエ。本氣で戦争を止めたかつたンなら、元老院と帝国上層部のクズ共黙らせて、和平案でもさつさと出すこつたな」

「なつー?」

ナギが驚愕し、アリカが苦虫を噛んだ顔になる。

ナギに反論など出来ない。

そして何より、レンが言つている事は、全て事実なのだから。

元々力試し程度の理由で参戦したのだ。そんな事を考へてる訳がない。

所詮まだ子供だ。

「戦争つてのは悲劇しか生まねエ。それはオマエでも何も変わらねエ」

「ナギ・スプリングフィールド。オマエは知つてンのか?」

自分の父親だからこそ、その軽率さが赦せない。

「力試しとか、テメエがふざけた理由で参戦し、戦争を長期化して、それが原因でどれだけの戦災孤児がいるのか」

「なつ……」

「知るこつたな。自分の作つた悲劇の数を」

呆然とするナギを尻目に、レンはアリカに視線を向ける。

「アリカ王女、『完全なる世界』を潰すのはイイが、別の側面からも調べた方がイイ。」

「…別の方面…へビツこつ意味じや？」

「奴らがどうやって世界を終わらせるのかじやアなく、何で世界を終わらせよつとしてンのかを - - - - - 「

- - - - ドォン! - ! - !

言ひ終える前に、どこから魔法による攻撃が放たれた。

爆炎と爆風が一帯を包む。

しかし、中から出てきたのは、アリカ王女とアスナを護つたレンだつた。

レンは、自身の魔法無力化の能力効果範囲を障壁の様に拡げる事で、二人を守った。

それ以前にアルトリアが魔法を斬つたおかげで、その威力は極小になつた。

ナギは範囲外だったが、自分の障壁で防いだのだろう。

「人が話してゐる最中にチャチャ入れて来るたア……潰されてエのか？」

レンの眼が、絶大な殺意と共に、龍眼に変わる。

「私が行きましょうか？」

「……いや、一撃喰らわしたらおないとまする。 - - - ナギ・スプリングフィールドオ！」

「！」

「あんな言い方したが、アレはオマエだけじゃなく、元老院や、帝國上層部、『完全なる世界』にも該当する。」

全てが全て、ナギのせいではない。責任は戦争に加担した者全てにあるのだから。

レンはただ、自分の行動に責任を持つて欲しいだけなのだ。

「アリカ王女、アンタにはコレを渡しておく

「うー、コレは？」

レンは、アリカにスーパー・ボール程の宝石を投げ渡した。

「ソイツは、王家の魔力に反応して俺に知らせる。もしアンタが幽閉されたり誘拐されたら魔力を込める。それくらいの小事なら助けてやる」

「そりか……有難う」

「ツ！……ビオいたしまして……」

表情が見えないように俯いて、レンは拳を地面につけて、炎熱系最強の欠片を使う。

アルトリアは、レンがアリカに礼を言われた時、嬉しそうな表情を作ったのを見逃さなかつた。

「…………『伝導、アグニッシュ・ワッタス炎神の息吹』」

ビキビキッ！…と、赤い光の亀裂が、龍眼で補足した敵に真っ直ぐ向かっていく。

瞬間、街の中からあらゆる物体を一瞬で蒸発する巨大な火柱が上がる。

ゴオオオオオアアアアアアー！！！！

「クツ……何だ、今のは！？魔力を全く感じなかつたぞ！」

余波の突風が消えた時には、レン達の姿は消えていた。

「間違いない。あれは確かに黄昏の姫巫女。フフッ、見付けるのに苦労したよ」

レン達の姿を遠くから觀ていた人形の事も、レンとアルトリアは見逃さなかつた。

接触（後書き）

真名十五票
千雨 十三票
アキラ十票
さよ六票
楓五票
茶々丸六票
夕映二票
裕奈一票
のどか一票
まき絵一票
先生陣七票

真名嬢が千雨嬢を越えたアアアアア！！！

アリアも人気なので、今の所はヒロインにしちゃいます。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

アンケート待つてます！

アルトリア・ベンチュラ（前編）

アルトリアの回。『都合入りますんが、勘弁してください。

ただ、一言。

どうしていわなったッ！？

アルトリア・ペンドラゴン

s.i.d.e三人称

『…………これで良かったのか?』

「あア、懃々悪イな」

レン達は、最早日課になりつつある紛争地帯の鎮圧、及び怪我人の治療を行なつた。今はその後だ。

「……レン、誰と話していたのですか?」

「アルトリアが、その内判らア。オマエニシモ・・・

どうしたと聞いたかつたが、用件などアルトリアの表情を見れば分かる。

「…記憶が完全に戻つたか?アーサー王」

「……貴方は本当に全て知っていたのですね……私の願いを」

「自分の存在の削除。選定のやり直し……か?」

アルトリアは目を閉じ、頷いた。

「……確かに、俺にはそれが出来ない訳じゃアねエ。時間を跳んで、オマエにカリバーンを抜かせなかつたらライイだけだからな」

「！だとしたら……」「だが、俺はそんな事は絶対にする気は無エ」「……な、何故ですか！？」

「そんな事に何の意味があるンだ？」

「なつ……ー？」

アルトリアは絶句する。

自分の人生も、

願いを、

想いを、

全てを知り、それでも尚、レンはその願いを否定した。

「一つ聞くが、ブリテンの王。オマエはその願いが何を意味してなのか、わかつてんのか？」

「選定をやり直す事で、滅びの道の回避できるのです！！！私が王にならなければ！ランスロットも死なず、ギネヴィアも不幸になることも……ッ…！」

苦渋と苦情に、アルトリアは顔を歪める。涙すら浮かべる程。

-----だからこそ、レンは皆がいる。

その願いは間違っていると。

「確かにオマエがやり直しを叶えれば、ブリテンはまた別の行く末を行く事になつていたんだろうなア」

「でしたひ……」

「今いの、オマエの国の血を引く全ての人間を消し去つてな

「なつ……」

もしアルトリアが、やり直しを遂げれば、アルトリアが死んだ後も生き残った人間を。

その子孫を、その生れざま全て『無かつた事』にされてしまつ。

全ての努力を、想いを、価値を、全て無かつた事になつてしまつ。

「何より - - - - -」

「オマエと一緒に戦つた騎士や、オマエが守つた国民の子孫は今、

この時代に国がなくなつたことで不幸になつてんか？そして、オマエに今も助けを求めてんのか？」

レンの言葉を聞いた瞬間。

アルトリアの願いの根本が、支えが、確実に壊れた。

レンは、『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から、一本の剣を抜き取る。

「『アーヴィング無毀なる湖光』！？」

「抜け、アーサー王」

レンはアルトリアに、最高の騎士の剣を向ける。

「……」

それに対し、最早条件反射になつてゐる動きで、鎧を換装して構える。

上段から、レンは『無毀なる湖光』を振り下ろし、レンの剣圧で、
アルトリアの体は弾かれる。

「ぐつ……！」

一瞬でアルトリアの目の前に移動したレンに、体勢を立て直して、
アルトリアは剣を振るった。

レンは、それを『無毀なる湖光』^{アロンダイト}で受け止めず、軸とし、アルトリ
アの剣を振り切らせた。

それにより、アルトリアの懷がガラ空きになつたが、

「^{インビジブル}
風王結界！！」

それに対し、剣を不可視にしていた風を解放して、自分を浮き上
がらせることで回避した。

本当なら相手を吹き飛ばすのだが、レンに風速200メートル以下
の風など当てた所で、剣圧で相殺されてしまう。

「…………ならばツ」

インビジブル・エア
風王結界で上に翔んだアルトリアがレンを両断するように振り上げ、

「ならば私は、どうすれば良かったのですかーーー?」

解き放たれた黄金の剣を振るつ。

受け止めたレンの足元が陥没する程の力だったが、『無毀なる湖光』
はビクともしない。

「他に……私は、彼此ごどく償えれば良いのですか
……！」

アルトリアの剣には力は入つて無く、膝をついた。

もう、そこには王はいなかつた。

ただ一人の、選定の剣を抜いただけの少女だった。

だが、

「へ……？」

「……な、何で……そんな、『ハア、漸くかア』みたいな顔をしてるんですか！／＼／＼」

「安心したからだ」

「え……」

「俺はその答えは教えてやれねエし、分からねエ。ただし、自己犠牲で償うなンぞ言こ出したら、もつペン頭ア叩いて分からせてやるだけだ」

自分には、安易な答えしか言えない。

「オマエは死ぬまで、死ンだ後も、王であり続けたンだ。オマエは守つたンだろ。自分が辛くても、苦しくても、王であり続けたンだろが。」

「う……ああ……」

「顔を上げろよ、前を見る。王の責務を十一分に果たしたオマエに、俯いてる理由なンダ、ねエンだからよ」

アルトリアの涙が溢れて、地面を濡らす。

その時、『無毀なる湖光』^{アロンダイヤ}が光の粒子に変わり、アルトリアに入つていった。

「これは……？」

まるで、何かを伝える様に。

「あ……」

アルトリアが抱えていた重みは、嘘の様に消え去つていた。

だから理解出来た。先程の『無毀なる湖光』^{アロンダイヤ}の意味を。

あれはで想いであり、願いだつた。

数々の想いが交錯し、小さな言葉は表せられず、ただ一言が刻まれていた。

『-----私達の誇りを、貴女に仕える事ができたと言ひ誓をお守りください』

「う……あ…………く…………つ…………」

ただ、完璧な王で在りうとした少女は、

- - - 少年の胸の中で泣き叫びながら、

漸く、長い責務を果たしたのだった - - - - - 。

アルトリア・ペンドラゴン（後編）

真名十五票
千雨 十五票
アキラ十一票
先生陣九票
さよ七票
楓六票
茶々丸八票
夕映二票
裕奈一票
のどか二票
まき絵二票
千鶴一票
古一票

千雨嬢がトップと再び並びましたね。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

メインヒロイン最大10人でいきます。

ちと多いかと思いますので、色々な意見とアンケート待っています。

人形（前書き）

アーウェルンクス、フルボッコ回。

アルトリア出てこねえ - -。

人形

s.i.d.eレン

泣き疲れたのか、アルトリアは眠りについた。

方舟の中のベットに寝かせたから外敵が来ることもない。

「つたく、無理しやがって……」

あの『^{アロンダイヤ}無毀なる湖光』は、円卓の騎士達の想いを『アイツ』が抽出し、構成したものだ。

アルトリアを王の責務から解放するには、俺がどういふことをいつてなんとかなる訳じやアねエからなア。

「レン」

アスナが部屋に入ってきた。アスナのベットは隣だから当然か。

例の如くアルトリアも、護衛の為にとか言つて同じ部屋にベット突つ込んできやがった。

「ビオした。アスナ？」

「アルトリアビウしたの？」

心配で来たのか。アスナも随分懐いてたからな。

レンには異常な程懐いてます。

「泣き疲れたンだよ。人間つづーのは、誰しも泣きたい時ぐれエあ
る」

「そう…私も泣けるかな？」

「当たり前だ。オマエに薬が投薬されてた効果時間がある状況で、
それだけ感情があれば上出来だろ」

そオだ、人なンだ。

王だううと何だううと、この世界に完璧な人間なンざいねエ。

誰だってミスはするし、失敗や間違った事もするだろ。

重要なのはソレからじゃないかだ。

オマエまだいる?」アルトリア

「……消すの忘れてたか

「どうしたの?」

「ちと忘れ事があったみて」

「忘れ事?」

「あア - - - - -」

・・・ヒッキーの人形を、叩き潰しになア

s i d e 三人称

其処には、とある少女を追っていた人形がいた。

レン達は、方舟に入る際必ず自分達を透明化する。

つまり、分かりやすく現状を説明すれば、

「見失ったか……。いや、あれは消えたが正しいかな。」

転移の形跡

も見付からないとはね。」

カツン。

アーウェルンクスシリーズ、一番田は其処にいた。
ブリームム

理由は勿論、黄昏の姫御子の奪取。

その黄昏の姫御子が、あの『禁忌』^{イノセイン}の下にいると判つたのだ。

カツン。

「これは『トコナミス』に怒られそうだね」

よう早く、黄昏の姫御子を回収しておけば、と後悔する。

自分の主である造物主^{ライフメーカー}が、異様な迄に警戒していた『禁忌』^{イノセイン}。

彼は、戦場に立つたのは一度きり。

立った戦場まるごと消された。奇跡的に生き残った、……いや、生きられた兵士達は恐怖のあまり、この戦争中は戦線復帰は不可能になつた。

カツン。

その後、彼は紛争地域などの復興に着手し始めた。

助けられた村人の話では、魔法を一切使わずに、まるで奇跡の様に傷を癒し、水などを自在に生み出し、紛争地域では誰も殺さず鎮圧した。

彼は600年前にも出現し、同じ事をしている。

カツン。

メガロメセンブリアからは『闇の福音』。帝国や、アリアドネーからは『金文の賢者』と呼ばれるエヴァンジエリン・A・K・マクダウェルの師だったとおぼしき人物。

何故、黄昏の姫御子を連れているかは知らないが、このままでは計画に重大な支障が出てくる。

カツン。

「一。」

セイジ一 番田は漸く、足音に気付かず、振り向いた。

其處にいたのは5・6歳の少年。^{ブリーフム}一番田は、その少年を知っている。

「『禁忌』……、君の方から来てくれるとまね」

またソレか、と、少年は心底つまらないと言ひたげな表情をした。

「どうせ目的はアスナなんだろうが

「やつ、黄眉の姫御子を渡してくれないか?」

「もし俺がそれで渡すと思つてんなら、『アーウェルンクスシリーズ』ってのは、幸せ回路で溢れてるみてエだな」

六歳の少年とは思えない言動。当然といえば当然だが、不老者か何かだろう。

「やはり君は600年前の『神の再来』^{ザ・セカンド}で間違いないようだね。改めて驚くよ」

「そんなもの返出来てたか。と、レンは内心頭を抱えているが、一番△△目にはそんな事は分からぬし、分からせない。」

「黄昏の姫御子は、僕達の計画の文字通り”鍵”なんだよ。君もこの世界の現状が解れば気が変わるかも知れぬけどね」

「世界再編魔法発動の為に始祖アマテルの直系で、『魔法無力化能力者』が必要なのは解るが、懲々世界再編魔法使う必要あんのかねエ？」

人形の様に、いや人形なのだが、感情が一切変化しなかつた一番目の表情に初めて驚愕が現れる。

普通、自分達の計画の全貌を暴露されたも同然なのだから、驚きもする。

「…………どうやら、君を生かして帰す訳にはいかなくなつたようだね」

一番田は跳躍し、『冥府の石柱』をレンに放つ。

「……一ぺん出来るか試したかったんだが、丁度いいか。
『アーデ・オブ・ザ・ライフメーク』、
『造物主の掟』、再構成」

「なッ！――！？」

レンは、『最後の鍵』を取り出し、”変型”させる。

ソレは、形を鍵から”槍”に変えた。

その槍が、インドの叙事詩『マハーバーラタ』の不死身の英雄の宝具に酷似している事など、一番田には知るよしも無かつた。

「『無極而太極斬』」
トメー・アルカイスアナルキース

その槍を振るつた瞬間、石柱は空間が歪む様に消えていった。

「バ力なッ……『最後の鍵』！？あり得ない……それでは彼も……」

「余所見たア、余裕だなアオイ」

レンが、一番目^{ブリーム}の後ろに回り込む。

『速』の欠片^{フラグメント}に、最強クラスの身体速度が加わっているのだ。

いかに『雷天双壯』でも知覚出来ない。

「『パワー』の欠片 - - - 発動」

「しまつ - - - 「『惑星碎き』 - - - 」

拳が命中した後、0・00001秒で地面に着弾する。

「が……、はツ……」

一番田^{ブリーダム}の体に、核をギリギリ傷つ付けない大穴が空いている。

何故レンが、リライトで瞬殺しなかったのは理由がある。

一度完全に起動したアーウェルンクスシリーズは、造物主が健在ならば短時間で創りなおせる。

最大の理由は、アーウェルンクスシリーズの性能を完全に把握する為である。

「 - - - つづ一かよオ。町中からずつと付けてきたから、よっぽど性能が高エかと思つて来てみたつて言つたのによオ」

「ハア……ぐ……」

「ンだア？ このバカみたいな三下はア」

凄王化も無しでコレとは、と、拍子抜けの表情であった。

「……化物……だね。主が……あれ程、危険視する……訳だ」

レンが持っていた槍は、鍵に姿を戻していた。

「テメエの、」主人サマに伝える。世界再編魔法は諦めろ、とな。
リロケート』
『

一番目は強制転移され、レンは方舟に向かった。

ブリームム

人形（後書き）

千雨 十七票
真名十五票
アキラ十二票
茶々丸十票
先生陣十票
楓八票
さよ七票
のどか五票
まき絵三票
千鶴二票
夕映一票
裕奈一票
古一票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアで
す。

夜の迷宮（前書き）

すみません。前話の本文が、後書きになつていたミスがありました
が、訂正しました。

今回はアルトリアとアスナのキャラが崩壊します。

夜の迷宮

s.i.d.e三人称

「レン、ここは何処?」

「あア、お姫サマが捕まつたらしくてなア。前にせつた宝石使つた
ンで助けにな。土地名は忘れた」

そう、今レン達はアリカ王女が監禁されている『夜の迷宮』に着いた。

ヘラス帝国第三皇女と秘密裏に接触し、『完全なる世界』について
今後どうするか考える会議の際中、『完全なる世界』に誘拐、幽閉
されたのだ。

紅き翼は、『完全なる世界』に見事嵌められ、指名手配になつた。

おやりく此処を田指しているだろア。

無論、警備はいるが、アルトリアとレンがいれば、殲滅は容易い。

「レン」

「あア？」

アスナはアルトリアとレンの教育により、とても人間らしい感情を取り戻しあげていて。

何より、自分に心をくれたレンとアルトリアに感謝している。

故に、

「アルトリアが変」

「ビクツ／＼／＼」

アルトリアの異変が気になつた。

アスナの一言で、アルトリアが面白いくらい分かりやすい反応をした。

頬は紅潮し、戦いの時や何時もの凛々しい顔は見る影も無い。

「大丈夫かア？アルト」

「あ、ああハイツ！？／／／だだだ大丈夫です！／／」

「あア、了オ解。大丈夫じやねエ事が分かつた」

あの一件以来、レンと近くに居れば居るほどこの症状（笑）は顕著に出ている。ちなみに、アルトといつのは「文字数がウゼエ」というレンのメタ発言による物。

ただ、アルトリアはレン以外に呼ばせる気は更々無く、レンに呼ばれるたびに嬉々としている。

「何この可愛い生物」

「寧ろオマエがどオしたアスナ」

「こう、主人に甘えたいけど恥ずかしくてもどかしがつてるペット
みたくて」

「な、何を言つてるんですかアスナ！？／＼／＼

逃げ出した。

正解には、夜の迷宮に突撃した。

その勢いは恐ろしく、あつという間に夜の迷宮を警備していた『完全なる世界』の下つ端を蹴散らして行く。

顔を茹で蛸のよつに真つ赤に染めながら、敵を斬る様は中々にシコールである。

「アスナ、オマエ狙つて言つたろ」

「うん、確信犯」

「チッ、どいつも『イシモキヤ』がブレてやがる。 こんな教育した
つけかア？」

アスナの変な知識は、紛争地域のおばちゃんの賜物である事を、レンは知らない。

アルトリアの殲滅が終わつた様なので、一人はアルトリアの所に向かう。

「アスナア」

「…………やつ過ぎた」

アルトリアは顔を押さえついぱくしまつ、うさうとのように連呼していく。

地獄の丘の上で。

「カミングアウトが駄目だったなア」

「『メンタルトリア。今日のヒーフライ一個あげる』

「れ、レン？！違いますよ！…あればアスナの只の冗談であつて…
イヤでもエビフライ……」

「まあ、知つてたがなア」

! ? ! ? / / / / / / / /

その後のアルトリアの混乱は割愛。

「シユールウ」

「何だそりや」

「レンの真似」

「次やつたらオマエでも叩き潰すぞ」

割愛。

夜の迷宮の壁を、アルトリアの剣で綺麗に切り取る。

「よオクーデレ王女オ、助けに来たゼエ」

「早いな、そなたがくれたコレを使ってまだ十分も経つておらぬが……クーデレとは何じや？」

刈り取つた壁の奥の部屋に、アリカと……ヘラス皇女を発見。開いた壁から、アスナが顔を出す。

「アリカ大丈夫？」

「すまんな。元気そうでなによりじや、アスナ」

嬉しそうな顔を見せるアリカ。まだアスナは笑う事が出来ない為、近くに寄ることしかアスナは出来ないが。

「紅き翼は……、丁度明けごろに着きそオだな。ちと早エが、飯でも食うかア」

「それは良い。是非そうしましょウ」

「おお食事か！食べるぞ……」

アリカと一緒にいた少女が喜ぶ。
褐色で、綺麗な角が一本生えている。

「…………何だこのクソガキ」

「クソガキ！？妾は帝国第三皇女のテオドラじゃ！無礼じやぞ！！！」

「位なんざ興味ねエンドだよ。俺に敬意を払わせたかつたら、それだけ価値のある人間に成りやがれ」

「むう…………そ、そもそもお主らは誰じやー！？」

「椅子並ベンの手伝えアルト」

「ハイ」

「無視するな…………」

「おおーーもぐもぐ、お主等がある、もぐもぐ、『神の再来』^{ザ・セカンド}なのじや ニューファーー？」

「物食つてゐる時に喋んじゃねー、仮にも皇女だらうが。…………そオだよ」

口に物を入れてる再中、喋つたら誰であるひと鉄拳制裁。

コレがレンの食卓のルールである。

流石に正論である上、皇女と二つ身分なので、反論が中々出来ない。

「それで聞きたかったのじやが、600年前もお主が確認されておるが、同一人物なのか？」

「あア、あン時はエヴァが一緒だつたがなア。今アイツビオしてんのかね?」

「何！？あの『金文の賢者』の師は、お主なのか！？」

「……その『金文の賢者』が誰かは知らねエが、エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルは俺の弟子だ」

レンはエヴァとアリアード・ネーで別れたきりなので、エヴァのその後を何も知らない。

誰かに認められた。

それだけで充分なのだ。

「……レンは一体いくつなのですか？」

「覚えてねエ。本来の時間軸に戻れば、肉体も成長すンだろオ

「本来の時間軸？」

「また今度教えてやる、…………來たみてエだな」

「姫さんッ！！」

予想より早く着いたが、紅き翼の到着である。

「遅かつたなア、脳筋」

「テメエ等！やつぱ『完全なる世界』の手下だつた力プッ！？」

「妾達を助けてくれた恩人に殴りかかるなバカモン！－！」

到着早々誤解し、レンに殴り掛かるナギだが、アリカのビンタで沈められる。

「何度目ですか……」

「アスナ、アレには絶対なるなよ」

「分かつた」

夜の迷宮（後書き）

千雨	二十一票
真名十五票	
アキラ十六票	
茶々丸十五票	
先生陣十一票	
楓十票	
れよ七票	
のどか五票	
まき絵二票	
千鶴四票	
夕映一票	
裕奈一票	
古川一票	

茶々丸票が急上昇し、千雨嬢がエライ事になつてます。

キャスターアンケートを取りましたが、友人から別作品のキャラにした方が良いとの指摘がありアンケートを中止する事になりました。

自分の身勝手で臆を立て迷惑おかけした事、謝罪申し上げます。

ヒロインアンケートは引き続き募集中です。

確定者は
アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアで
す。

重ね重ね、申し訳ありません。

騎士の呪文の男（前書き）

ナギって、対剣士の場合どうやって戦つんだろ？.....？

騎士王ヒトの呪文の男

s.i.d.eレン

紅き翼 + 姫様方 + 僕等で紅き翼の隠れ家（笑）のあるタルシス大陸極西部オリンポス山にやって来た。

「じゃあ、コイツ等は姫さん達を助けに来た訳か」

「あの状況で何で気付かねエンだよ。やつぱだ脳タマが著しく劣化して
ンのが原因かア。詠春……だっけか？リーダー変えた方がいいぜ」

一緒に食事をしている奴も敵にする思考、先走りの上、物事の視野
が狭エ。チームのリーダーとしては最悪だなア。

「最近本氣で考えつつあるよ。ええと……ブレイドだつたな、この
前はナギが世話になつたようだな、有難う」

青山詠春が、頭を押さえながら返していく。

言つちや悪いが、哀れ。

「オマエはアイツの母ちゃんかア？」

「ハハハ……」

笑いが乾いてンゾ。

「ブレイドよ

「あ?」

アリカ嬢が話し掛けて来る。まあ、大体は内容は予想出来るが。

「我等と共に来てはくれぬか?やはり我等には、お主が「しつけ」
ぞ。俺は確かにオマエを助けたが、そこまでしてやる義理はねエ
……そつか」

俺の一言にアリカ嬢は黙る。そこに白髪頭のオッサン ガトウ
が出てくる。

「しかし、君も分かつていいのだ。このままではこの世界は、
『完全なる世界』に滅ぼされてしまつ。そうなれば君も……」

「知ったような口説いてンじゃねエよオッサン。俺は『完全なる世界』の思想や方法はともかく、”アイツ”の理念は嫌いじゃねエんだよ。」

「ハア！？世界滅ぼしあつて奴のり…リネン？あああっ！わからんねえけど、嫌いじゃねエつてどいつも事だよ…。」

「俺はソレを調べるツツつてンだよ馬鹿」

俺はそう言い終わると、踵を返す。

アスナの義理は通した。もう用は無い。

「なあ

「あ？」

「お前、俺仲間になれ！」

「イツ、アリカ王女との会話聞いてたンじゃねエのか？」

「ハア、ルフィ上等の台詞で悪いが、ソレはもオ断つたじやねエか。
ホント頭トンでンな」

「知るか…行くなリ俺を倒してから行けッテのツー」

ツたく。リロケートで転移すンのは簡単だが、『リドトンズラ』
たらまた言い出しそうだしなア。

まあ、問題はソコじやねエ。

「……貴様如きの軍門に降れと…？戯言が過ぎんぞ。貴様、我がマ
スターを侮辱するつもりか」

「へつ？」

アルトが滅茶苦茶キレてんのが一番の問題だ。

馬鹿ナギが気の抜けた声を擧げる。

何も考えてなかつたよオだなアこの馬鹿。

にしても……受肉には成功したンだが、バスはズタズタ。

未だ仮契約すらしてねエのに、何だこの忠節度は？

確かにライダーが同じ様な事を言つた時も、キレた筈だが、これ程
じやなかつたよなア。

「……フウ、分かつた。だつたら力ずくだ。
蹴散ハラシらせ、

”セイバー”」

「了解しました、”マスター”」

アルトリアが、黒スーツから騎士甲冑に姿を変える。

勿論ナギが騒ぐが、そんなものでアルトリアは止まらない。

「ちよつ、何でアンタが出てくんだ!?俺はソイツに『私はマスターの剣、ならば私が戦わずして何が騎士だ。それとも、貴様はそんな事すら判らん愚者か?』

流石に、そこまで言われて引き下がる程、ナギは穏和でもなく、賢くもない。

「……チツ、アンタには用はねえんだ。さつやと遇いて貰うばー! マンマンテロテロ……来れ、虚空の雷 雜ざ扱え
『ディオス・テゴコス 雷の斧』! ! !」

ナギは詠唱が短い『雷の斧』をアルトリアに叩き付けるが、対魔力Aのアルトリアに、中の上の威力の魔法で傷をつくれる訳がなく。

紅き翼のメンバー（詠春以外）が何も言わないのは、ナギの行動を邪魔しても無駄だと分かつっていたからだ。

「随分と讐められたものだな……」

「無傷……嘘だろ？」

少し呆けたナギに、縮地（レンが教えた）でナギの懷に潜る。

「ヤバッ」

一閃。

ナギが避けたのは、ただの幸運だったりつ。

だが、それで攻め手を緩めるアルトリアではない。

「これは……」

「スゲエ……」

「何者ですか彼女は……」

紅き翼の面々が、感嘆の息を漏らす。

嵐の様な、清流の様な、あらゆる面を兼ね備え、最強クラスの剣士であるラカンと詠春が見惚れる程の剣戟。

これが騎士王。

「ハアツ！！」

「ガツ！？」

剣戟の嵐に耐えきれず、バランスが崩れたナギにの横つ腹にアルトリアの蹴りが入る。

アルトリアは、フツ飛ばしたナギの着地点に回り込む。

しかし、ナギも簡単にはやられない。

虚空瞬動で上に飛び、あんちょこを使用。

「百重千重と 重なりて 走れよ 稲妻」

ナギが広域殲滅呪文の詠唱を始める。アルトリアはそれを見て、力
ードを切る。

「 詠春、ラカン。よオく見とけ。そして刻み込め」

レンの声に、一人がハツとする。

今まで見えなかつた不可視の剣が、姿を現す。
現れたのは黄金の聖剣。

アーサー王伝説の真骨頂にて、アルトリアの宝具。

その名は
。

「『約束された

』

「オラアッ！－！『千の雷』！－！」

キーリブル・アストラペー

「勝利の剣」！－！」

「アレが、世界最強の剣だ」

その一筋の光は、千の雷を軽々と呑み込み、

「ゴシッ－！－！－！」

オリンポス山の一角を根刮ぎ消し飛ばした。

「　　「　　「…………「つわあ」」

「ナギの奴、死んだんじゃねェか」

「いや、生きてんよ」

クイッと、レンが指を引き寄せた様に曲げると、ズタボロのナギが煙から飛んで来る。

『念動力』サイコキネシスの欠片フラグメントを使ったのだ。

飛んで来たナギにボディーブローを決め、龍掌でアルビレオが治療可能な状態まで治す。

「つー訳で、俺達は行く。精々足掻け、俺達も足掻く。」

「”またね”、アリカ」

「 ああーお主達もな

「 ロロケート」

いつて、レン達は紅き翼と別れた。

次に会う場所が、アスナを欠いて『墓守の宮殿』とは知らずに。

騎士王と千の呪文の男（後書き）

千雨	二十三票
真名十九	票
茶々丸	十八票
アキラ	十七票
先生陣	十一票
楓	十一票
さよ七	票
のどか	六票
まき絵	二票
千鶴	四票
夕映	一票
裕奈	一票
古川	三票

茶々丸がベスト3入りにツ！――

唐突ですが、アンケートを取ります。

このまま行くとサブヒロイン入りになる十票以上持つてる先生陣を誰にするのか。一度先生陣に票を入れた人でも投票してください。

それと、キャスターアンケートを再開します。

考えましたが、何故かどいつもこいつもエヴァにキャラが被るので。

現在は

玉藻六票

メディア五票

まさかのスカサハ一票

前言撤回ばかりで、謝ってばかりで申し訳ありません。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

感想やアンケート、待っています！

想定外（前書き）

敵がチート級に.....。

s i d e 三 人 称

そこはある田家の近く。

「……ツたく。転生者つてのは、糞の掃き溜めしかいねエか?」

血の様な真っ赤な眼。何故か地面に引き摺らない、足元まである長い綺麗な白髪を首元で括っている少年。

「これで685匹目……この時代の転生者は残り数匹程度
か。ここまで多いとはなア」

目の前には何も無い。

少し影が地面に焼きついている以外は。

大戦期は、力を手に入れた転生者が力を試すのには格好の時代。

戦争中に、誰が誰を殺したなど調べようが無いからだ。

そんな転生者を殺して約700人。ハツキリ言つて割に合わない仕事だと言いたげな表情を作る。

戦地を龍眼で観て蒸発させるだけなのだが。精神的に参ってしまいそうなのだ。

「はてさてエ、^{ヒック}造物主はどうするつもりかねエ？」

転生者を狩りながら、紛争の災害地域を復興＆鎮圧しながら、元老院の『完全なる世界』との闘いの証拠を集めまくっているレンは呟く。

原作での最終決戦まで残り数日。にもかかわらず、計画の核であるアスナはレンの下にいる。

「そろそろ来ンだろ？がなア」

今まで襲つて来なかつたのが不思議で仕方がない。

そんな事を考えながら、アスナとアルトリアの元へ向かっていたレンの視界が、世界が”換わる”のを捉える。

「『^{ウンコンパンデントニア・インフィニータ}無限抱擁』？いや、空間を閉じる結界の最上級魔法かア？」

レンは世界がいきなり変わったのに、何の動搖もしない。

それどころか、即座に分析を開始する。

「誰もいねエのは、ちと寂しいか

ドオンツ！－！

レンを中心に、『^{ウーロニア・フローシス}燃える天空』級の爆発が起ころ。

そんな中、一人の黒ローブを羽織つた『魔法使い』が現れる。

「.....」

造物主。
ライフメイカー

始まりの魔法使いと呼ばれる、『魔法世界』を造った『完全なる世界』の首領が降り立つ。

「ぶつ

しかし、爆炎の中から出てきたレンは無傷だった。

とこうか吹き出していた。

「ギャハハハハ！！　アマテルちゃんよオ。　ンだア？　その思わせ振りの登場はア？　現実にビビッて田エ背けてたインテリちゃんとは思えねエよナアー！！」

「…………私とて、”貴方”を相手にしたくなかった。ただ、事は急務だ。済まないが、少々ここで時間を潰させて貰うぞ。武の神よ」

それは、いじめられっ子がいじめっ子に必死で言い返している様に見えなくなくなもない。

事実、凄王と造物主との力の差は、それ程までに広かつた。

レンは、唇を歪めながら周囲を見渡す。

既に龍眼を発動しているレンは、世界を隅々まで観る事ができる。

「……人形共がいねエのを觀ると、ここに俺を押さえてる間にアスナア拐おオつて魂胆か？」

「…………まあ、差違は無い」

「ハツ！イカれンのは一人でやれや！ オマエの人形共でアルトリアをどオにか出来ると思ってンのかア？」

何考えてんだこのバカ?、と、レンは信頼の言葉を吐く。

アーウェルンクス達が束になつても、自分の従者サーヴァントは揺るがないと。

「フ……フフフ」

「あ?」

しかし、蟻と星ほどの力の差があるといふのに、造物主は笑っていた。

対照的に、レンは笑いを止め、眉を潜める。

造物主のそれは、虚勢の笑いではなかつた。

「確かに、デュナミス達では貴様の『剣』を潜り抜ける事は不可能だろう。アレと手を組むのは些か躊躇したが……」

「…………何言つてんだ？」

理解出来なかつた。

一体何が造物主に自信を与えている?

「今の貴様は私を殺す寸毫の時すら惜しいはずだ」

「何だと？」

「転生者、というのだろう?」

トメー・アルカイスアナルギアース
『無極而太極斬』 ツツツツツツツツ

それからのレンの行動は早かつた。

自身の得物で結界を断ち切り、世界を穿つ。

「フ、足掛けよ『アダム』」

結界魔法から力業で抜け、二人の元へ向かつた。

だが、レンは先程の造物主の言葉を即座に否定する。

転生者？フザケンじゃねエ。

それは、まだ幼さの残る少年の姿をしていた。
紅い布を腰に巻き、同じく紅い布をバンダナのように頭に巻いている。

裸の上半身と顔・・・目に見える素肌の全てに黒い刺青が刻まれていた。

「オイオイ、救世主ひ牠は遅れてやつて来るハーナギ、ハルカ
遅すぞじやね?」

『ハヤシの黄金の懸』^{ヒラタ} ま、^{そんなもの} 轉生術では済まない。

想定外（後書き）

千雨 二十五票
真名一十票
茶々丸二十一票
アキラ十八票
楓十一票
さよ八票
のどか六票
まき絵三票
千鶴四票
夕映二票
裕奈一票
古三票

玉藻十票
メディア六票
スカサハ一票

刀子四票
シャークティ三票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

感想、アンケート待つてます！

宣戦布告（前書き）

かなり無理矢理、「都合主義ッ！」

なにより皆さんの反応が怖い

s i d e

レンはそれを知っていた。

第五次聖杯戦争の約70年前に起きた第三次聖杯戦争の際にアインツベルン家に召喚され、敗れた後に聖杯に吸収されたサーヴァント。

悪で在れ、そう願われ生贊にされ死んだ時、その本質に絶対悪の因子を持った英靈が誕生した。

憎まれることで世界を救つた英靈……。

だが、何故そんなものが『ネギマ』いる?

転生者……と考えれば簡単だ。

しかし、レンの龍眼は転生者を転生者であることを観抜く事も出来る。

その眼が訴え掛けてくるのだ。

『コイツは違う』……と。

それ以上に、レンが簡単にアルトリアやアスナに転生者の接近を許すか？

レンは半径数十キロ圏内に転生者がいれば認識出来る。

事実、田の前に居てもコイツを転生者として認識出来ない。

つまりコイツは、転生者じゃない。

しかし、仮に復讐者アヴェンジャーとして、最弱の英靈がアルトリアと遭遇すれば潰されるはずだ。

思考が淀みなく働いている時、それが視界に入った。

その、近くにアルトリアが傷だらけで倒れている姿を。

「 ッ！－！」

レンは思わず怒りの沸点を越えそうになるが、思いとじまる。

ヒリでキレたらアルトリアも巻き込まれて死んでしまう。

アスナは既にここには居ない。おそらく人形共が連れ去ったのだろう。

今出来る事はコイツからどれだけ情報を引き出せるか。

「……………」アン・リマコ

「オオッ！正解正解大正解！！流ツ石モノホンの神サマ、しかも管
理者から選ばれた特別スペシャルモノできそこない。造物主とはやつぱ違つね。」
そ、俺は『この世全ての悪』。間違っちゃいねエよ」

ゾロアスター教の悪の容認者である神靈と自称する少年は、口を三日月の様に裂いて笑う。

「何で『こんなトコ』インだよ……。聖杯はブツ壊れて、受肉出来なかつたンじゃねエのかよ！そもそも俺とオマエじゅア『世界』が違うだろオガ！！何でアスナを抜つてやがる！？」

ネギまも漫画の世界だから、 fateが有つたつておかしいくはないが、それが『この世^{アン・ワ・ム}全ての悪』がここにいる理由にはならない。

「あア、それねそれ。俺はあの時、確かに現界出来ずに消し飛ばされた。そこに転がってるオマエのお^{サー・ヴァント}気に入りにな」

「だが、吹き飛ばされた位じやあ合計12体分のサーヴァントの溜まりたまつた魔力は消えねえ」

「…………」

「ツつても、聖杯の欠片がなけりや宝の持ち腐れだ。あの？『世界』じゃあ俺は現界出来ない。仮に有つたとして、また修正力が働いて失敗するだろ。この『世界』にもアンタがいる様に」

「だったら簡単だ」

「この世^{アン・コトハ}全ての悪はど^シぞの政治家の様に大仰にアピールする。

「聖杯の欠片が必要のない器がいる『世界』に行けばイイ。『魔法』ぐら^レいの奇跡を起こせるだけの魔力^{オレ}が大聖杯の中にはあつたからな。いやはや、並行世界様々だぜ」

「了^オ解。つまりソイツは俺がオマエの死体でギネス取れッつ^ウ解釈でイインだな」

「おつと怖い怖い、そんな眼をむけるなよ。まあ、確かにこの世界にも修正力はあつた。しかもとびきり強烈な奴が目の前に。でもまあ、悪運は俺に味方したぜ?」

「……俺がオマエを殺せね^エとも言ひて^エのか?」

「だつてお前忙しいじやん」

アンリマコの言葉は、実に今のレンの状況に合つている。

「口でさえ転生者つつづ馬鹿共のせいではない上、今は世界の終わりの瀬戸際だ。それらをイッペンに終わらせて更に俺を止めるなんざ、どこのマゾゲーだって話だ。もしくは難易度アスクラスの戦争ゲーか？」

アンリ・マコは、とても軽く言つが、実際現状の問題は山積みだ。

最悪、造物主は紅き翼が何とかするとして、オステイアの崩壊はレンならどうとでもできる。だが、それではアスナが最低2年は封印されてしまつ。

更に元老院も気になる中、それらを止めるのがお使い程度に思えてくる『この世全ての悪』が現れた。

レンは確かに、これでもかと言つてつい詰められていく。

だが、

「それがどうした？」

そんなことではレンは揺るがない。

「造物主を殺す、元老院も潰す。オマエを現界させねエ」

「理想論だな」

「出来ねエと思つか?」

アンリ・マコは嬉しそうだったが。

「マジでやりそうだな。そりやそりや、どいじやのことみねきれい人格破綻者ことみねきれいの様にやアいかねえな。ま、あんな奴の真似事出来る奴がいたら終わりだがな」

「……………ぶぜ

「……せー?」

余裕ブツコってる所悪イが…………首、飛

「
ぶせー?」

ザンツー!!

瞬間、アンリマコの頸と胴が切り離された。

別にレンが何かした訳ではない。

斬つたのはアルトリアだ。

「ハアツ…………ハアツ…………ぐツ…………」

「アルトツー!!」

レンは剣で何とか体を支えるアルトリアの元に走った。

「よく生きてた、アルト」

「すみません、アスナが……クツ」

レンがキレずに済んだ要因の最大の要因は、アルトリアの眼は死んでいなかつた事だ。

もしアルトリアが死んでいたら、造物主には悪いが、魔法世界は終わっていただろう。

レンは自分に注意を向け、満身創痍の状態でアルトリアがアンリ・マコを仕留める機会を窺っていたのだ。

だが、

「まだです……レン。奴はまだ……」

「分かつてる」

こんなモノじゃ終わらぬ。

「痛つてエなあ、いきなり首飛ばすコタアねえでだろ。てか、バレ
てたか」

その言葉を放つたのは、紛れもなくアンリ・マコだった。

「当たり前エだ。こんなんで終わるンだつたら、オマエなんぞにア
ルトが傷食らう訳ねエだろオガ」

切り落としたアンリ・マコの首と胴体が動いている。

胴体が、首を捨い。くつりける様に呑わせると、泥の様に混ざり合
い、再生している。

「^{オマエ}この世全ての悪は本来、人間の中に悪意がある限り、不变不滅の
存在。その力が、今は不完全として現界してんのか

そうでないと奴が、アルトリアに勝てる要素が無い。

「またまた正解。つても、この魔力からだはオレの意思を出させるだけの媒介に過ぎねエ。もう一発エクスカリバー食らわせたら消滅すんだろうがな。だが、大聖杯が有る限り何度も顕現可能だ」

「つまり、大聖杯ほんたいを潰したら終わりってトコか」

「人間の中に悪意が消滅したらな」

人間の憎しみがこの世に存在する限り、物理魔力的破壊では、『この世全ての悪』アン・リマゴは殺せない。

「ああ、後は造物主と組んだ理由だつたな。簡単だよ、その方が手つ取り早かつたからだ」

「…………？」

「態々造物主できやくしゆと組んで、黄昏の姫御子を拐つた。ここまで言えば、アンタなら分かるだろ?」

「…………まさか」

アンリ・マコが、裏切るかもしれない造物主と懲々手を組んでも、
アスナを拐つた理由。

考えてみたら、そんなもの一つしかない。

「
黄面の姫御子が、聖杯オレの寄り代としては最高なん
だよ」

「
殺すッ！……！」

「
ドヨンッ！……！」

レンが睨むだけで、アンリ・マコの地面が吹き飛ぶ様に破壊される。
しかし、

「アハハハハハツ！！！無駄だ無駄！！
言つたる、この”オレ”は末端とはいえ、『アン・ジヤコ
その殺意がオレを生かすんだぜツ！！』

即座にアンリ・マコの体が、泥から再構成される。

「それにオレの事ばつかじやなく、自分の従者サーヴァントの心配した方がイイ
ぜ？」

「ツー？」

「ああつーーー！」

直後、抱えていたアルトリアが悲鳴を挙げる。

アルトリアの体が、茨の様に黒く侵食していくのだ。

「まさか

黒化ーーー？」

「またまた正解。進路希望を探偵にした方がいいな、アンタ」

「…………テメエ…………」

「にしても……随分黒化が遅いな。あ、成る程！僅かにオマエの魔力が供給されてるからか。アララ残念、セイバーは奪えなさそうだ」
………… オイオイ

思わず、アンリ・マコが冷や汗を流す。

「『速』 + 『火』 in 『一方通行』」
デイーランドライブプロミネンスフレア
アクセラレーター

「それだけの光速プラズマ爆撃だよな！？」

レンの前方。半径数十キロが吹き飛ぶ。

いかにアンリ・マコの末端とはいっても、既に何発かアルトリアの約束クスカリバされた勝利の剣を食らっている。その状態でこれを喰らえば、大聖ホンエ杯に帰らざるえないだろう。

『アン・リヤー』
『この世全ての悪』は、宣戦布告した。

アルトリアを黒化で侵食し、アスナを拐うという最悪の挑発をして。

この接触でこの戦争の結末は大きく変わった。

世界は体験するだろう。

復活した邪神、怒り狂つた武神。その二人の神々の戦いを。

確かに、どれだけ攻撃しても消滅させても、人間にほんの一欠片で
も悪意が存在している状態で、『この世全ての悪』は滅ぼせない。

レンのアレを除いて。

宣戦布告（後書き）

千雨	二十五票
真名一	十一票
茶々丸	二十一票
アキラ	十八票
楓	十一票
さよ九	票
のどか六	票
まき絵	三票
千鶴四	票
夕映一	票
裕奈一	票
古二	票
玉藻十	票
メディア六	票
スカサハ一	票
刀子五	票
シャークティ二	票
しづな一	票

レンによる「チギレ世界崩壊フラグ立ちました。」（オイ

原作ブレイクのタグ、追加した方がいいのかな？

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

アンケートや感想、待っています！（（（（；。 。 ）））

本契約（前書き）

まひせひたゞ（ ）、（ ）、（ ）

これは何だ？

始まりの刑罰は五種。

生命刑、身体刑、自由刑、名誉刑、財產刑、様々な罪と泥と闇と悪意が回り周り続ける刑罰を与えよ。

悪で、あれ。

ドクンシ、

私は瞬時に理解する。理解させられる。

「これが……この世全ての悪……」

幾千、幾万、幾億もの怨鎖の声と共に、泥で出来た腕が私に伸びてくる感覚。

分かる。これは私を呑み込むつもりだ。

泥は、私の四肢を掴み、呑み込もうとするが、何かに弾かれた様に霧散する。

微量な何かが、私を守ろうとする。

長い間傍にいたから分かる。これは、レンから供給されてくる魔力だ。

だが、ラインが不明瞭な為に、その膨大な泥ヨコが魔力ごと呑み込む様に、口を開ける。

これに呑み込まれたら最後、私の体が、私の魂が、私という存在が汚染される。

奴の操アンリ・マユり人形にされ、マスターレンに刃を向けてしまう。

「ふざけるな……ッ」

私の主マスターに、私を救ってくれたあの人に刃を向けるだと……！？

そのような真似をするぐらいなら、

いつそ

！――！

「アルトー・アルトッ...」

意識が目覚め、瞼が開きレンの顔が見える。

表情が、焦りと悲痛に歪んでいる。

馬鹿者だな、私は。

「アルトー...返事しやがれッ！」

「ハアッ.....ハアッ.....レン、すみま、せん。不覚を、とりました」

レンにそんな顔をさせるなんて、自分が嫌になる。

下半身の感覚が痛み以外なくなっているが、そんなもの、レンに苦痛を与えている事に比べれば気にも止めなくなる。

「気にはんな、ンな事アビオでもイイ。今は
があります」……何だ?」

「レン、頼み

「私を

殺してください」

「…………俺を馬鹿にしてんのか?」

「このままだは、貴方に剣を向けてしまつ。それだけは……そん
な事をするぐらいなら」

死んだ方がマシだ。

ズグン!!

「……………クツ……レン……………早くシ……………」

侵食速度が跳ね上がる。レンの魔力の恩恵の限界だろ。

レンは暫く目を閉じ、開く。

「……………しゃアねエ、か。目エ閉じる、アルト」

ああ。最後迄、貴方と共に戦えなかつた事が心残りですね…………。

レンの指示通り、目を閉じる。

「最後じやねエよ」

不意にそんな弦きを聴いた時、とある箇所から感触があつた
。

チュツ。

チュツ?

唇から。

本契約

へつ?

本契約（後書き）

突然ですが、『王の財宝』^{ガート・オブ・バビロン}の宝具とかの募集をします。

自分で知ってる宝具少ないので、こうにつけた説のこいつ効果の宝具アルヨ的な感じでお願いします。

それと、次の更新が少し遅れます。もう一つの作品が2、3話出せたら再開しますので、ご容赦ください。

千雨	二十六票
真名一	十一票
茶々丸	十一票
アキラ	十八票
楓	十一票
さよ九	票
のどか九	票
まき絵	三票
千鶴	四票
夕映	一票
裕奈	一票
古二	票

玉藻十一票
メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ二票

しづな一票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1949w/>

ネギま！～二人目と呼ばれた男。～

2011年10月8日20時57分発行